

# 渓 綾

NO 22



徳高

浦 和 渓 綾 山 岳 会

## — 吉頭巻 —

遭難は絶対に起こしてはならないものである。当会は創立二十余年、遭難らしい遭難は起こしてはいないが、いつこの災難に襲われるか分からぬ。遭難事故が発生すれば、同好のふいで集まっている当会では、存続の危機に立たされることは明らかである。絶対に起こしてはならないものではあるが、万が一の場合にも遭難対策費ということでスズメの涼程の積立制度があることにはあるが、この公報と訂後にて「遭難対策に肉する取り扱め(案)」と、会則に似たものが説定の手元に渡っていると思うが、自分を考へ、会を考へて知恵を出し合い、真摯に議論を重ね、より明確にして万一の遭難に対するようにようではないか、また遭難事故を起すことなく、釣糸、登山活動をして行こうではないか。

(H)

南アルプス全山縦走の記録 - - - - - 1

記録者 藤田己三夫

長沢美代子

石井孝明

篠原孝男

佐藤なほこ

前飛高岳北尾根より合宿へ - - - - 関根和雄 - - 26  
 奥飛高岳南稜(トリコニー) - - - - 関根和雄 - - 28  
 昭和51年春合宿終括 - - - - - - - - - - - 30  
 中崎尾根から槍ヶ岳 - - - - 沼田昭三 - - 31  
 剣岳から五竜岳 - - - - 沼田昭三 - - 35  
 山行報告 - - - - - 風間 進 - - 41

その1 丹沢(戸沢左俣)

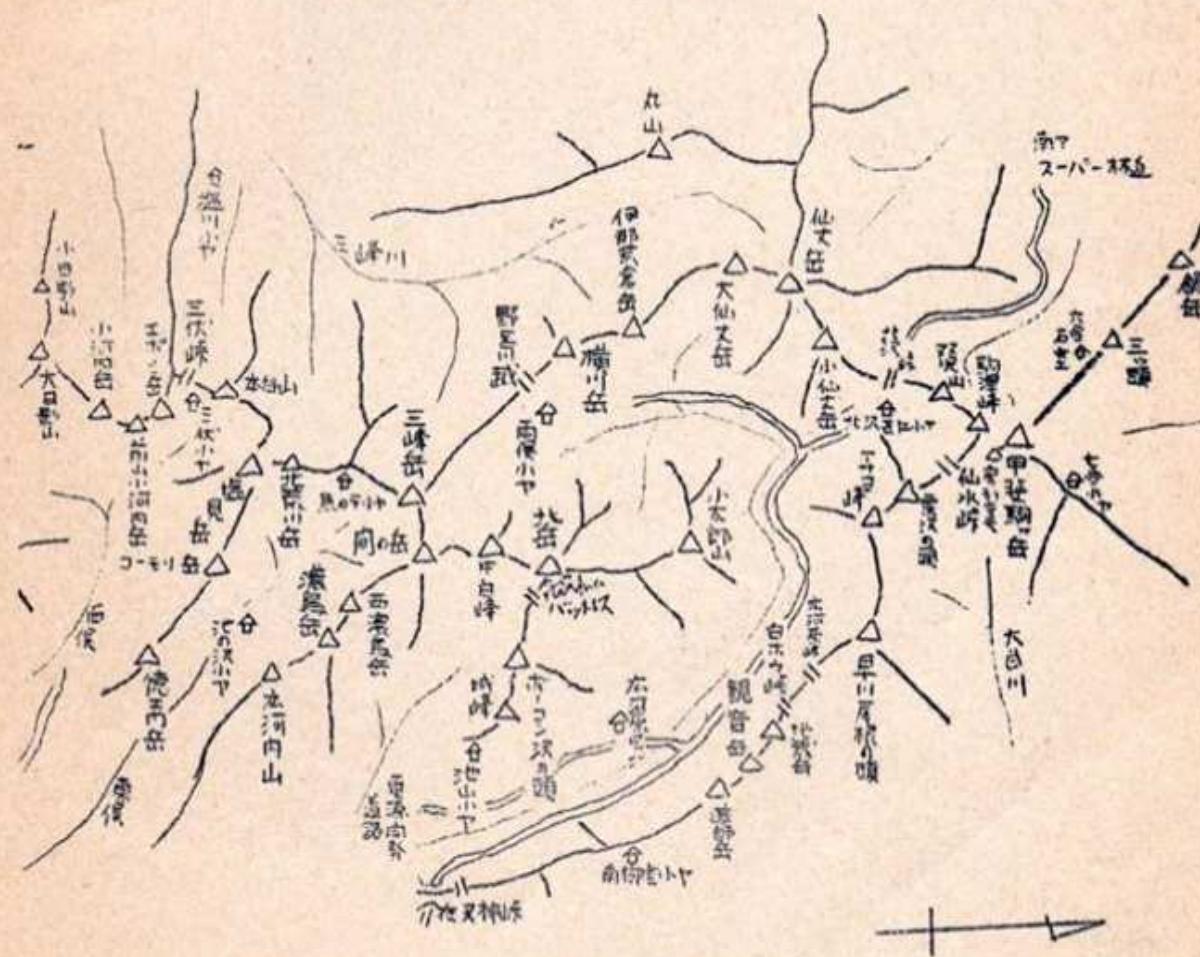
その2 三ツ峰

その3 滝谷(サ2尾根P2フランクヘドーム中天穂)

ウスキーピバーグ - - - - 中村青明 - - 44  
 池山尾根から北岳 - - - - 山下京 - - 45  
 一の倉沢ミルンセ - - - - 石井孝明 - - 48  
 一の倉沢ニルンセ - - - - 石井孝明 - - 49  
 北岳バットレス-尾根正面壁 - - - - 石井孝明 - - 50  
 扇風岩中央カンテ - - - - 石井孝明 - - 51  
 ある話レ合いかう - - - - - - - - - - - 53  
 冬山合宿回顧 - - - - 富士志助 - - 55  
 雜感 - - - - - - - - - - - - - - - - - 57

# 山 縱 走 の 記 錄

昭和 51 年 7 月 24 日～ 8 月 5 日



# 南アルプス全

## ◎ 行動報告

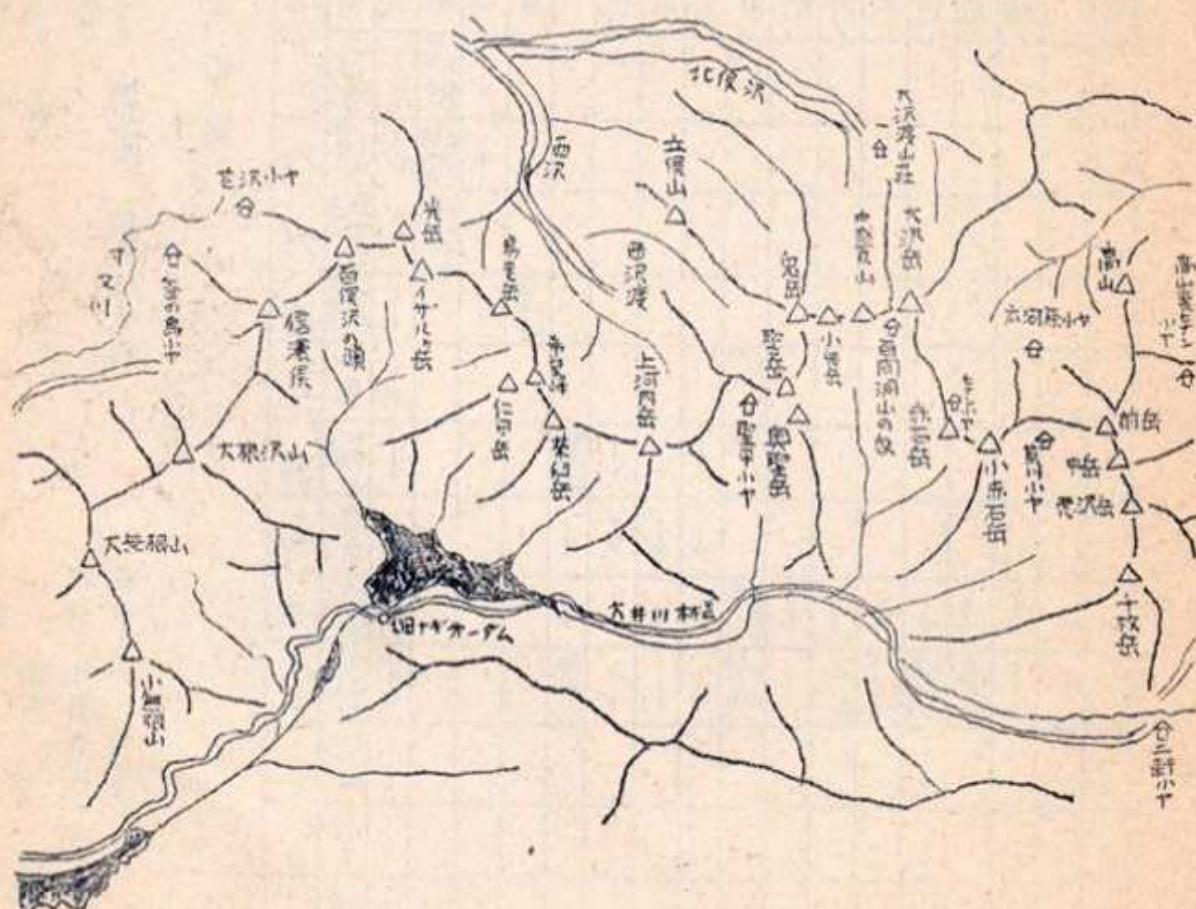
## A隊報告 藤田己三夫・長沢英代子

巴隊 石井 宏明

C 隊 篠原季男

口隊、報告乃し

正隊 佐藤なほこ



一  
は  
じ  
め  
に

近年、当会においては、新人の加入があまり見られず、会員の平均年令も上がる一方になつてあり、行動にも現われてくるようになつた。

こうした中で今年は、男三名、女五名の新入会員を得、従来、岩登り中心におなつてきた夏期合宿を、体力の増強と精神力の涵養を主眼として、南アルプス全山縦走を計画・実施した。会員の中には、岩登りを取り入れないことに反対の意見もあつたが、会そのものの存続が問われている現在、一人でも多くの会員の参加を目的にすることが、今後の会の運営にプラスになることを納得してもらひ、十六名の会員の参加を得て、無事、終了することであった。

しかし、十六名といつても、会山綱走はたった二名しか参加できず、この二名に勿木の筋筋を背負わせてしまつたことを会は謙虚に認め、今後の譲顧として考えて行かなければならぬものである。

三、行動

氏名	月日
小杉	
佐藤	
沼田	
中村	
鈴木	
牧野	
吉田	
中小	
田丸	
岡田	
根原	
篠原	
石井	
風間	
長沢	
藤田	
	7.24
	7.25
	7.26
	7.27
	7.28
	7.29
	7.30
	7.31
	8.1
	2
	3
	4
	5

A隊	藤田	長沢
B隊	石井	
C隊		
D隊		
E隊		
中田	吉野	牧野
中村	沼田	佐藤
他に	小杉	鈴木
日から	が早急入山	
日まで		
	八月	

四行動記錄

七月二十三日 新宿2355 甲府257

(日隊と別れる)

集合予定の時刻より一時間あくれば  
の18:00アルアス広場に行く。金田日  
のためか、まだ最前列、一番の札を  
もらう。(下)

七月二十四日 甲冑2.57(巴隊と別  
れる) 夜叉神峰6.00 夜叉神山  
莊7.20 苛平14.00 南御室小屋14

甲府にてB隊と別れる。バス始発  
（駒ヶ岳）4:00 次は6:00 4:00には  
間に合わせタクシーをひろう。やつ  
とのことで夜叉神まで行つてもらう  
ここは運転手は柄が悪い 我々の足  
元を見ている。だけどこのまま帰る  
訳にはゆかない。

峠6:00 山莊7:20 長沢君も俺も  
いつもより重い荷物で少々、いや、  
相当きつい。今日は、約五時間の行  
程なのだが、実際に八時間半を要して  
いる。夜行の疲れもある。荷物の重

さもある。今日は調子が悪い。小休止をたびたびとる。二十九三十分毎にとる。こんな休み方は危にもいけないと判つてゐるのだが、肩に膚に重みがひびく。つい……。

南アの一般ルートとあって、ハイカーが目につく。十人くらいのペーティが三、四つくらいはあつたろう。当然我々はビーチになり、あえこながら登る。小雨がぱうつく中を、やつと小屋につく。焼肉と缶ビールでさやかにパーティを開く。

消燈19:00、今から南ア大復走の为一夜が暮れようとしている。

卷之三

二十五日 小屋530 菓飯57  
26 観音岳750 地蔵岳1200(ゲ  
ス發生) 広河原峠160 早川屋  
根小屋1700

甲府駅で三日月を見、夜又神峰登  
山口までタクシーの中で、朝焼けを  
見る。墨元のよそうな気配だ。然  
山口で水を汲み、50出発、いよい  
よ全山縦走の第一歩である。

初日で荷が重く体もためないため  
ケベースが無い三十分以上歩くこ  
とができない。720度又神峰に着く  
正面に白峰三山を仰ぐが、これから  
の行程に対する期待と不安の入り混

入山二日目、東の空には白けた三  
日月、仰げほいくつかの星、星はあ  
まり輝いていない。今日の天気を物  
語るようだ、が出発時に雨でないの  
はうれしい。助かる。小屋カ西裏側  
を薬師に向かって登る。途中ハケ岳  
奥秋父、富士が青黒い色を呈して雲  
海上にそびえる。薬師岳、この辺り  
から北アの燕岳に似てくる。白砂と  
遠松、だけじ庵ほ無の方が多い  
観音を経て地蔵に向かう。今日は

4

本調子とはやかないと、昨日よりはいい。地蔵につく10泊頃。オベリスクは、大ハーテーの連続で登小下谷寝となる。11月26日隊と交信をとり全然入らず、今頃どの辺りだろうか。

地蔵を出て、今日リ泊地、早川小屋に向う。白鳳峰、広河原峰を経なければならぬが、小さなピークの連続で足もつて立ち止まる。三山を飽れた力で出合う人は極まれである。白鳳峰への下り付近から小屋へは、ほとんど樹林で倒木などがある。サックがひっかかるべくれす。またぎこえるにモ一苦勞。そのたびに呼吸が乱れ、整えるのにまた一苦勞でも、こうして記していく今は、早川小屋のキャンプサイト、今日の事が目前に迫り、また明日から、大縱走の三夜が我々を待っている。そんなことを考えると、まだまだこんなことは、と、よけい奮い立つ。たゞ長沢君が元気がないのは多少気に入る。

□ □ □

明け方、眼が覚めてテントから外をのぞいてみると、そこは暗闇の世界であった。黒一色の中にテントの赤い灯がいくつか揺れている様は、幻想的な美しさであつた。ラジオテント場を後にし、よく晴れたた空の下、登り始めていくうちただないうち、樹林の向から富士山が見えた。薬師岳の手前のピークで小休止。白峰三山が見えろ。あと何日かしたらあのピークに立つといふことがなかなか実感にはなうない。7月20日薬師岳を越える。この辺りは、北アルプスの燕岳に似ていると藤田さんが言う。標高路は遠くから見ると雪のようないし、つめた砂だった。7月5日朝音岳へつく。ここまでは順調なペースだった。アカヌケの頭へ行く途中、空身で飛びおり、後から荷を降す竹が二ヶ所あつた。一つは二米近くあり、他のパティに助けでもらつたりして、かなり時間を浪費した。10時過ぎにアカヌケの頭に着いた。つき地蔵岳へ往復する。

サイの河原には、お地蔵様が何体があり、おさい錢まであった。オベリスクは、鎖がついていて簡単に登

れそつた。人がタリで登るのはあらめて、しばし、昼寝をする。  
アカヌケの頭に戻り、鶴岳のB隊と交信を試みるが、不通。まだ甲斐駒の向う側にいるのだろうと想像する。

アカヌケの頭を去り、やがて、も「たいないよう下りに石を、余り下りりで、広河原へ下ってしまったのではないかと思つたりしたが、14時半車に白鳳峰へついた、続いてうんざりするよう登り、山での登り降り口、当然のことなのだが、倒木またぎや、倒木ぐりは、肉体だけではなく、精神的にもまいらせたようだ。16時広河原峰についた頃は、かなりバテていた。ここで藤田さんに先に行つてもう一歩、少し遅れて歩き出す。まだケガだかと思ううちに、早川尾根小屋に17時頃つくと、萬田さんがテントを張りかけていたので、荷を置き手伝う。

七月二十六日 早川小屋 6:15 アサ  
三峰 栗沢の頭 仙水峰 北沢長衝  
小屋

昨日と同じ樹林帯歩きから今日が始まつた。出発早々下痢ぎみで再度仁義をさる。冷たい水を飲みすぎたようだ。アサヨ峰までの登りがこだわる、アリヨまで上つてしまえばあとばゆるい登り下りなので、比較的楽だ。前方には甲斐駒。左手には北岳が大きく眺め、はろか下には林道が白くうねつて伸びている。

最後のピーク 粟沢の頭から峰までの下りは一時間といふことだが、重荷のため、ヒザがガクガク熱くなるのが頭の芯まで伝わってくる。仙水峠にて大休止。ここから駒往復した人たちがどんどん降りてくる。俺は、昨日からタバコが切れてしまうのでシケモツさが一だ。だけどなかなか見つからない。あきらめてうすいパイプを吸う。

一時向弱くらい休んでもらうか、ゴロゴロした岩の間に道をみつけながら、北沢小屋を経て長衡小屋に向う。

△ △ △

6.15. コースが短いので、のんびりした気分で歩き出す。上り下りが

すい分あるが、目前のピークを見る

とガックリするので、でゅるだけ足元だけを見て歩くようにながけた。元だけを見て歩くようにながけた。

アサヨ峰は、巻き道を行つたため

ピークには立たなかつた。まだかるだかと思つて立つた。ピークから振り返ると、先程巻いてきたピークにケルンが見える。ハハア、あれかと思つたが、震る気にはひうなかつた。

標線の縦走路は、太陽の光をとえざるものがある暑い、蔭になつた岩肌は冷たくヒンヤリと快よくホッとする。

10:30 粟沢の頭に立つ。甲斐駒が赤いクロテスクな顔で不気味だ。仙丈がびっくりする程大きくなつたり

とて見える。北岳が他の山を制圧して、ひとそや高くそびえている。鳩鳴をはさんで鳩鳴が見える。あそこまで歩くのかと思うと気が遠くなつてくるようだ。

いつの間にか下に見えていた雲が上がつてき、ガスで甲斐駒の姿が隠された。体が冷えてきたので仙水峠

まで一気に下る。

12:05 峰で再び大休止。北沢長衡小屋まではあと一時間。

万河原は、熱い太陽に照り焼かれめ、さほど気にならない。夜叉神峰から、相前後して、一緒に巻いて来た人たちの姿はもう見られない。

アサヨ峰は、巻き道を行つたためピークには立たなかつた。まだかるだかと思つて立つた。ピークから振り返ると、先程巻いてきたピークにケルンが見える。ハハア、あれかと思つたが、震る気にはひうなかつた。

標線の縦走路は、太陽の光をとえざるものがある暑い、蔭になつた岩肌は冷たくヒンヤリと快よくホッとして、暑くてたまらない。やがて樹林帯に入ると、すぐに北沢小屋についた。小屋の管理人に、早川屋根小屋の管理人から預かれた手紙を渡すとサイダーをごらそうになつた。そのまゝ沐浴に下り、北沢長衡小屋のサイダーをごらそうになつた。その後、おも浴浴に下り、北沢長衡小屋のまゝ広い幕場につく。一歩、先程もう、たサイダーを飲む、久しぶりの炭酸水がノドに気持ちいい。

七月二十七日 甲斐駒往復

長衡小屋 6:10 双子山 駒津峰  
駒 仙水峠 北沢小屋 長衡小屋  
12:00

空身なので高度をどんどんかせぐ

今日もあまり天気は良くない。風も多少ある。駒津峰では、小休止も短く、駒へと急ぐ。駒でもガス、てしまい、四方さるで視界が効かない。風をさけて二十分くらいい岩かけにかかる。

下り、彼女はちよつと寂めだみた

いだ、摩利支天の方向に下つてくる

と、砂走りのよう下りにくい、登

りは、前がつかえていたため、本峰

にダイレクトに登ったので岩稜だ、

た。駒津峰へもどり、仙水峠へと下

る、登りにはさついたところだ。

昨日と同じ道を北沢小屋へと休ま  
すに行く。小屋どちらかと下りたと  
ころで下休止、河原だ。しばらく休  
んでから、篠原もそろそろ着くころ  
どうとキャンプに向う。

案の定、彼は来ていた。午時頃着  
いていたらしい、途中会った東京の  
最上さんという人と一緒だった。篠  
原は仕事の都合で歩きと行動できな  
いということだった。夕食を早々と  
四人で済まし、14:30 篠原を見送った  
ちよ」と残念だった。

その後、最上さんと三人でいろいろ  
語り合い一夜を共にする。  
缶ビール三本とウイスキー少々で  
今日は腹が少しこうだ。一  
ケージ久一ぶりのビールではう酔い  
し、気分はよくなかった。

6月10日 空身で甲斐駒へ出発、今度  
の縦走中、最も暑い日のはずだ、た  
が最も苦いんじゃま、た日、空身  
だと思うとつい足が早くなる。

駒津峰が近づくと、まるでそこか  
ら吹きあわすような冷たい風が肌を  
突き刺すようだ、歩いているのに汗

はおろか、暑いとも感じず、逆に寒

気がしてどうしようもなかつた、

調子が悪いので無理をせず、ゆっ

くりと頂上へ向かう。9:40 頂上に立

った時は、ガスで視界がきかず、岩

蔭に風をかけて小休止。しかし、寒

いので、いくうちも休まずに下山、駒

津峰までくると、大部分が良く左

り仙水峠を経て北沢小屋の下の沢ま

で一気に下る。現金なもので気今は

す、かり良くなつていり、沢で少し

遊んでから下る

テントには篠原君がいち早く来て  
いて、最上さんというお客様もいて  
いた。四人でござやかな食事が始まった。

新鮮な野菜と果物、それに最上さん

持参の肉で久し振りのごちそうに

舌びつみをうめた。

## C隊報告　篠原

二十六日 新宿発マルアス7号にて

目的地 伊那北を目指して出発

長野で降り四時三十分の飯田線

に乗り伊那北で降る。

伊那北から四人パーティと意見が

あい、タクシーで戸台に到着

戸台にて、朝定食を食べ、6:15 戸

台出発、途中、三回の休憩を取り

り、マイペースで8:30 丹波山荘に到着

山荘にてB隊があすけたトラン

シーバを受けとり、8:40 山荘出発、

ハ丁坂をイ・キに登り、9:25 トラン

シーバでA隊と交信したが通信です

す、断念。

途中、北区赤羽の最上幸徳さんと

知り合い、二人で北沢のテント場ま

で歩き、10:30 A隊のテント場に到着

、その時は、A隊はだれも居ず、

最上さんと一緒にテント場にて休憩

一時三十分頃、A隊が帰還、A隊

の料理により四人で昼食

午後二時三十分A隊と別れ、戸台

に向って出発、5:45 戸台に到着、戸

台より、バスとタクシーを利用して

伊那北に到着、6.40 アルアスク界にて鳴京

感想として、今回は私一人だったの途中話し相手がないなく、あまり愉快ではなかつた。その上、休暇が三日の予定だつたのが一日一ヶとねずみには迷惑をかけてしまつた。誠に申し訳けなかつた。

七月二十八日 長野小屋 5:30 仙丈  
岳 10:30 雨僕 16:15

昨日も天気が怪しかつたが、今日は快いだけでもなく登頂から雨になつた。稜線から樹林に入るところだつたと氣憶する。  
今日は、例の最上さんと泊地で別れてから二人とも調子がよく、重荷にもかかわらず、仙丈まで五時間予定していたのだが、約三十分早くビルに立つた。しかしすぐにガスがまわりに漂い始め、展望は効かない。早々に頂を降りて仙塙尾宿に入る。翌近く雨が降り出す、小舟なのであり難にせず、雨具もつけず雨僕へと下る。下るといつても小さなぎり

降りの寒流で少々気がめいいる。それと倒木が多いので避けた。高望の池につく。13.15分遠くで雷の音、雨も前より大粒になつたようだ。用具をフッケル。

今日は多少荷が肩にくい込んで痛いが、がまんできる程度なので、一時間に五六十分钟左右の小休止にする。長沢君は水の飲みすぎのせいかどう、午後になるとその影響が出るらしく、足が鈍くなるのがはつきり見えてくる。水をセーフするよう注意する。

雨の中、野呂川越えからの一時向は滑りそう力急な道で突破口した。それでも予定通り、今日の雪雲丸雨保につく、16:15。我々のパートイが最後ういい。小屋はここからさうに五分程下流に在り、その周辺が正規のワイトラーだが、次のそばで都合のいいここに天張ることにする。

いよいよ、今まで北上してモチナルアスをじターンして南下を開始する。日、鳳凰三山へ向がう最上さんと別れて5:30出発。きつともなく、タラタラでモモい適度な登り。一かし頂上は虚い。あせらずゆ、クリーブ一步着実に。確實にあの頂は直づいてくるのだからと自分に言いしかせて進む。

9:55仙丈岳の頂上は、ガスで展望はつかない。風でガスが吹き払われた時にカールのテントが見え、仙塙尾根が見えた。まだまだ行程は長い

になる。  
明日は稜線小屋だ。行程は六時頃ぐらいだが、かなり登りはそついだろ、雨の中の出発というのはいやなものだ。ただで明日は何と一ても稜線小屋まで行かなくてはならないできれば午前中に着いて夕陽を迎えてやりたいが、そうゆくだろうか。とにかく今、テントをたく雨の音が、明朝には消えてくれと祈るばかりである。

しばらく移線伝いに行き、あとは巻いている。樹林帯の中に上下が旅人バカ尾根に入る。倒木またぎで倒木ぐりがあり早川尾根に似ている。下りばかりの道だと尾い水を飲み過ぎ疲れが目立つ。

雨が降り始めてから高望光に着く時折、西鳴が響き、雨具を着て出発バカ尾根はいつまで行つてもつきない。やっと野呂川越に出、西俣へ下るが、かなり急なうえ、雨で地盤がゆるくるっているので、まったく気が抜けない。165西俣小屋のテント場に着く。

夜、雨の中西鳴を聞きながら眠りにつく。

七月二十九日 西俣6:15 左俣大滝  
7:30 中白根沢の頭10:00 北岳12:00(?) 九合移線小屋13:00

雨は上がりたが、今日もくもり空を見上げ背負うぞとひつぐ。沢添いに二、三分下ると左俣バ合流してくる。対岸に物り左俣を逆行する。何度も対岸に飛びるが、左俣大滝を目指す。ここまで約一時間半

ここから急登が始まる。登りも下りもやがいらどころだ。何度も小休止してやつと中白根の隠れ里めの所で交信する。しかしピークがじゃまで入らない。

十時頃だらうか、中白根のピークらしきものを見る。やつと移線に這い出す。

11:25の定期交信も入らない。

休んでいろと、みろみろクラにヨウリの様相は変わり、ガスゲ目の前のピークさえも隠そうとしている。雷の音も直立に迫ってきてよう存感がするので、迷い立てられたように歩き出す。

北岳の肩にて一本立て、ガレを登りつめて白不ヤニの高峰北岳に立つしかし下界は見えず、それほかりか崩さで降ってきた。水を一口飲んだだけで下山に移る。

ハ木筋を上っててくる道とぶつかるコルにて小休止。D隊がここから上ってくると思われたので、長沢君を元に小屋へ向かわせ、ここでD隊と待つ。浅移コールを何度も叶ふが応答はない。もう元に着いていたのであるらど、二十分位で着つ。

下り口急で、荷に苦しめられ腕の動きが自由にならないので、何度も止してやつと中白根の隠れ里め所で交信する。しかしピークがじゃまで入らない。

13:50 小屋に着く。ロ隊はまだの

ようだ。テントワイトをやつと二つ盛保し荷物をおろしたところで、ケ

スの中でピークに向って移線コールを叫ぶ。すると、かすかに答のようなものが帰つてきたよくながするモラ一度、子ちかえぬい、南根の声だ。俺は思はず喜び、長沢君に何か飲み物をつくろようたのんでから、さっそく隠れ里を迎えに行つた。

14時四人は、元氣で笑顔を見せてく出た。久しぶりの反応握手。D隊一行と俺がガイドにつくと自らしく体も肩も与えるいりか。雨が少しだ降り出でて来た。

A、D隊六人で設営。その後降ったり止んだりの中で食事づくり。すき焼き、カラダ、せん香りただようメロン、そして皆さんで飲むワインスキーノ。春華な食事だ。語り、食べ飲み、そして寝つた。

夜になつて、雨があがり風が出てきた。何度も目がさめたまま、寒い風の夜だった。でも、この風がこねか

らの天気をよいものにしてくれるようだ。俺の心は、もう晴れていた。

6:00、雨のあがつた両俣小屋を出

発、左俣に沿って進み、途中、右へ左へと徒渉を繰り返す。

7:30、左俣天滝の手前から危巻が始まる。土がゆろくて足がすべりくなりテこする。浮石も多く、危るつかしい道である。やっとハイマツ帯に出る。後ろに塙見岳が見える。

10:00頃、中白根沢の頭を巻き、ロ

謎と交信を試みるが不通。

12:00頃、北岳の頂上に着くと同時に雨。そのまま休まずに下り、ハ本筋りコルからの道と出会う分岐点でり跡を持つ。いかしながらか来ないので、跡は先に行っているかもれないといふ。私が一足先に稜線小屋へ向かう。跡はまだ来ていない。後からきた藤田さんと幕場を巡んでおく。

向もなく跡を到着。久一振りに見る顔が妙になつかしい。時折、激しく降る夕立ちの中で寒い食事。

雨が止ると、北岳小屋の上にさわ

い虹があり、しばらく戈を忘れ見て見ていた。日が暮れて、山々が紫のツルエットとなり、やがて暗闇の中に溶けこんでいくのをあさすに眺めていた。

で樂しい。  
6:45に出発する。快晴の稜線はすばらしい。7:30中白根から間の岳の手前に雪峯が見え、そこでシャーベットを作ろうということになろ。

8:20雪峯で大休止。あまりおいしくないので食べ過ぎないように注意する。

9:15間の岳に着く。上りはアラチラである。という間に着いてしまった。

間の岳からの下りは、石がゴロゴロしていく浮石が多い。熊の平への分岐点に出荷物を置いて空身で悪岳を往復する。分岐から熊の平への道は、間の岳の山腹をトラバースしている。踏跡ははっきりしている。

15:40熊の平の周辺は、色とりどりの花が咲き乱れていた。

D隊報告 L・南・肉根和・岡田  
小池

七月三十日 稲嶺小屋 間の岳 蔗  
島小屋(農業往復) 三国沢 断  
能の平 15:40

山に入つてもう一週間になる。六人という大々パーティで行動するのには、二人の時とは、また違った意味

久しぶりに夏山ラリー日記を見  
る。まさに雲のじゅうたんともいえ  
る雲海の中からひとときわ青く富士が  
その勇姿を見せせる。いよいよがら  
その美くして、感嘆の声を察せずにはいられない。今日は快晴皆の顔  
もどこかすがすがしい、懇親めざむ

ノ中白根を挿してゆき、くり歩き出て  
薄い影が足元に伸びてゐる。ビーフ  
にて小休止、向の岳9.15、スアワア  
を撮る。嵐見山が南方に青黒く異様  
な威圧感を持って座っている。明日  
はあそこまで行くんだと思うと一步  
一歩に力が入る。二十分くらい休ん  
だりうか、下りはジグザクの急なげ  
しである。

林の中のサイトに案内される。案内されることはいう外は、実はここは、皆小屋の人が割りふるのである。小屋にはちよつと遠いか、ヨカリは静かで、考えゆくはここもぢやなかいいところだ。

暗くなりはじめたころ夕食を済まし、ショーラフの中にもぐり込む。今日までの通りの行程で終る

長島岳の少一キ前へニニカラニ國沢へ入り熊の平へ行く)に荷を背いて農場往後、まだかまつたゞと西川乃挂の小ビーグを踏んで行く。空間でモロ々嫌気がさしてくる。

本峰は、西雲島からしほうく歩いた奥の奥にあつた。じークはあまり広くなく、三角形のコンクリート圍柱と標識があるだけ。昼食。

冬、たゞいう満足感を胸に下山する。往復二時間三十分

う約一畳四帖弱で、熊の平た、水湯はあるこちにあり。我々は遅い到着なので、小屋からすと下にさがった森

七月三十日 熊乃平 安倍宗義  
伏見川岳 道臣宗 本谷小三  
小屋

に着く。ここはケルンが二つ三つあり、陽だまりでのんびりするにはいいところだ。ここで一本立ててケラフ開始する。平坦な一直線の路が、いつしか小石を散らした登りにくいやアツの路となり、高度を増していくことが、先行く人の足を見ていくだけで判る。もう少し、もう少しと声をかけ合ってたどり着いたところが北俣分岐だ。ここから備端へとゆるい稜線が馬の背のように伸びている。反対側に目をやれば宇安マルアス、遠くは北丁の連峰までが望める。そしてすぐ頭上には、檜見の二つかじークかそびえ、そのどちらにそ人があふれている。額が見えろ程度くだ。北俣から三十分、本降に着く。大休止、西方にゆるやかに伸びる尾根の端に銀色に光る三伏小屋り屋根が大自然の中にただ一つメカニック的な存在として目に映る。定期交信のあと原を発つ。

またテント ソエルトがひしめきあ  
い、ところ狭いと震られていて、我  
の入るスキを容易に得られないも  
のではないそらだ。やつと今は、廻  
小た沢の中にみつけ百ことができた  
下はグランドシートをひき、上はフ  
ライというこへこそ正真正銘の簡易  
テントを張ろうとひろげていろいろち  
吉野さんを先頭に、E隊が跡からわ  
りて來た。そのあと続々と続き、予  
定で四名と思つていたE隊は、合  
計七名にふくれ上がつて、全部  
あわせると十三名、大部隊だ。大  
俺もこれにはびっくりし、それ以  
上に嬉しかったことはいうまでもな  
い。

5.5行種が長いので早立ちとする  
對称の中に端見が見え隠れする。

この縦走路は、同じ仙臺尾根でも  
仙丈から野呂川越までの道に比べろ  
と、何とかに樂に感じた。發錦に出  
ると、そこは全部歩いて來た山々だ  
し、振り向けば、これから越えてい  
く山々が目に入る。縦走は、まだや  
つと半分である。

扶欄の中、緑の濃い山を歩く。上り下りと繰り返し、12:20頃山頂駿  
小屋に着く。

三角形の二階建のアレハアだ、遊  
憩小屋にしては新しいためか、珍しく清潔できれいでいた。

小屋から下った所に落葉が  
ある。余り大きくなはないが、小じんまりとして感じがいい。

夕方、天候が崩れる前兆のような雲が見つかる。

四〇

俺もこれにはびっくりし、それ以上に嬉しかったことはいうまでない。  
酒の席に呑みて、俺もこうとうになる。体の調子はよかつたはずなの  
に妙に酔いが早いようだ。それ程飲  
んだ訳でもないのに。

機にありながら皆人の話一聲を  
聞いてみると、なつかしい郷里のや  
が家に帰つた都會人のようにも体  
も安らぐのは事実だ。夫

八月一日 三伏小屋6.0m 工本ノ魚  
前河内苗 高山夏雲越也

今日から宇村さんを加えた三人で  
お出でになります。昨日まで軽々と荷  
物今日は着に食い込む、

残った人たちだけにあいさつし、中村さんを加えて三人で大銀走を続ける。

そうした方がいいかないと思つたが、

やはり急ぐ旅でもなし、予定という  
二文字が頭の中から離せず、結局日  
尚山裏となつた。

エホンまで上りぬは、あとに羊飼  
の尾根歩きである。休みを何回せし  
て二十分も歩くと、小こ内内花畠の  
中にヒナントリがバッと目に入った。

テント場と水場は、小屋から五六分下ったところにある。テント場は、二三ヶ竹に奥在し、十五六二十張くらいしか張れないような小さなものだった。木はちょうどようという表現がピッタリの極細いものであった。

日が高いので、やつくり一三人で冷やかに舌づつみをうた

高川治いに林道を歩く。いたる所  
で湧き水が高川に流れ込む。高川小  
屋を通り過ぎ山道に入る。高川にか  
かる丸木橋を何回か渡る。屋根はシ  
ケサクの丸瓦をりで、三十㍍歩いて  
十分位の小休止というペースで歩い  
た。樹林の中のシケサクはさつかつ  
た。

途中一に回本隊と交換する。三伏  
小屋を下り、下花畠の中を三伏沢の方へ下って、本隊の待つ幕営地へと  
急ぐ。

途中、一回本隊と交換する。三伏  
小屋をすぎ、下花畠の中を三伏沢の方へ下って、本隊の待つ幕営地へと  
走る。

巨商報告  
上吉野 中田 牧野 鈴  
木 中村 沼田 佐藤

七月三十一日 伊那大島 6.10  
井 墴川キャンプ場 9.15 三伏小

卷之五  
三休汎小屋

前宿駅は夏山をめざす人達でいつ  
ぱりぎみが、我々の乗った列車は

二時起床 紅茶とお菓子を食べ  
見ゆへむかう。朝の冷気が眠気をそ  
よいでくれる。メンバーは 中田  
吉野・鈴木 治田 佐藤の五人  
暗い樹林の中を進み 李谷山は暗

いうちに通りすがり  
空を明るくなり始め、塩見岳の雄  
姿が見えて来た。塩見小屋をすぎろ  
と、がらがらの岩クズの登りとなり  
歩くのがつらくなろ。山頂は目の前  
だ専悪くらかな道進まない。岩の上  
をはうようにして登ってやっと頂上

日本アルプスの山々が眺められ、  
それらを写真に收め頂上をぶりた。  
帰りのメンバーは十名。

三伏小屋を経て奥沢井まで一気に下った。この日も天気が良く、山々の印象が薄く残り、またまた山への説教に勝てるそつがない。（佐藤）

八月二日 高山裏宿地 9:00 前往  
通直 8:30 萩川小屋 10:00 赤石 12:30 百間洞キャンプサイト 14:30

3月30日起床。五時頃日が昇る。不暖昧なほどの朝焼けだ。それに加えて

レンズ雲が東の空に二つ三つ浮んで  
いる。今日はあまり良くないらしい  
から発、樹林帯の中の登りからはど  
まり、約一時間三十分で高度約六百  
メートルのがれ沢をつめる。今日は  
何故か濕れる。顔がむくんでいるを  
と言われ、自分でもはねばったい顔  
だらうと思う。

コルに這い上って小休止、休んで  
いるとガスが風に流されたがら稜線  
を飛いてゆく、ちよつと休んでいろ  
と寒くなる。

荒川小屋あたりにくると風もでて  
きた。小差の人のいうには、午後四  
時になるだらうという。ちよつと心  
配になるが明日の天候が良くなる保  
障はどこにもないので、着風の中、  
稜線にとび出す。大障子平はすごい  
因だ、一瞬息が苦しくなり、足元も  
ふうふうとなる。

赤石までは、だらだらした道のよ  
うに感じた。荒川小屋へ向う人、百  
間洞へ向う人にたびたび出合う。  
足が冷えるので雨具のズボをほき  
赤石のビーチではセーターを着込む  
相變ゆらぬガスと風の中、二、三  
十分休んで予定通り百間洞へと急ぐ

途中、百間平は、その名の如く広々  
としていて、高山植物が咲き乱れて  
いる。天気がよければ、サツクをお  
うし、カメラを取り出し、そして席  
そべってみたいところだ。

百間平がら約四十㍍でワイトに轟  
く、例のごとくラストなカケ、沢の  
すぐそばにソニルトを張る。この時  
大粒の雨、二、三回落ちてきた。ツ  
イルトに三八で入ることにする。

今晩は、ボテトサラダと中華牛、  
残りの食料が氣になるが、何とか  
なるだらう。あと四日尚だ。

前进が、停茆か、雨が当分降らない  
だらうという中村さんの吉葉で出発  
前から吹きつける風に押されながら  
前進、八聖寺平付近で霧陣になる  
か入る済く、視界がさかなし中を、  
小谷石岳から赤石岳へ

稜線の風は強い、前が見えないの  
で頂上までいら立たしいよう召長さ  
を感じる

12:30 露宿の岩石に立つ。小休止  
のあと出発、依然、天気は変わらない。  
い、いまつこりと開けた竹に出た。  
何も見えないが団りの気配でそれも  
解る。風を弱い、百間平だ、以前は  
涙原でもあつたのだらうか、足元の  
草群れが枯山た池塘のように見える  
晴天なら、さを涼しい所だらうと思  
われ残食でちょうどいい。

しばらく下って、14:40 百間洞露  
地に着く。才でにそ小程広くもない  
い幕場はいつほいであつた。仕方な  
く沢沿いのゴミ捨て場の横にツェル  
トを張る。

雨が降つたりやんたりすらうちによ  
沢の水の音を聞きながう眠る。  
八時三十分頃、涼しい雨の音で目  
をさます。小屋へ避難するかなどと

高いながら、昼間の疲労があるせいか、いつの間にか眠ってしまった。

八月三日 百面洞キャンプサイト6

30 中盛山9:00今一兎岳10:05 聖

岳12:00 聖小屋13:30

朝方、雨はやんだが風が強く、おかげでツエルトの屋根の部分はず、かり乾いてしまった。暑りである。10:30 幕場をあとにし、山の奥まで次第に下る。

7:10 山小屋から、樹林帯の中を参り出す。8:00 大沢岳と中盛山との鞍部に出る。ガスはそれ程薄くない、富士山が頂上が雪に隠されていて見えない。小雨が降り始める。

10:05 兔岳を過ぎる頃より、本格的な雨になり、ガスも濃く、風も強くなり殆い。

先がら聖岳を一度下って樹林帯を抜ける。そこは激しい雨も風も避けらる事ができ、しほしほとする。聖岳の稜線の手前で、風雨を避けツエルトをかぶっているバー・テーがあり、それを緑目で見てそのまま歩く。赤紫色の岩板を吹き抜ける激しい風に、全身びしょ濡れ方りで、小屋に泊まる。着替えとし、熱いココアで体を暖めると、やっと人地がついた。

い風に、くじけそうになりちがう進む。途中、ピバークしようとにも適当な所がない。ハイ松の中に迷子こまが、全身びしょ濡れで、立ち止まる。と体が冷えてくる。動いていろぼうが暖かい。気分的にも楽なので、そのまま前述

雨の中、聖は遠く、道は長い。小さなビーグルがいくつもある。黙々と走るだけを見つめて歩く。中村さんや林田さんは車をひいてくれる。苦しきは、ほとんど感じない。額にある肉が痛い。突風で体は、仰け反れそうになる。

12:10 聖岳に立つ。休むことなく下り始める。何度もよろめきながら危険斜面をジグザグに下る。

聖平に近づくと、いろいろ花が咲き乱れている。特に、ニッコウキヌマの群落は、夢咲いがスの中にボーッとオレンジの花が一面に広がり、とても素晴らしい。しかし、足元の道はめぐるみ、水は次のように流れていた。

全身びしょ濡れ方りで、小屋に泊まる。着替えとし、熱いココアで体を暖めると、やっと人地がついた。

時折、突風が吹いて小屋が揺れた。明日が天候が悪くなる。

昨夜はハ時頃からどしゃぶりの雨に変わり、沢がすぐそばなので、中村さんは、増水を心配したそうである。

とにかく、ソコラフもツエルトも版も全てといつていいほど雨にぬれだ。

ところで今朝は、4:30起床、三十分遅れ、外は昨日と同じよう雨を行くが、稜線に上がりた時、富士山が見えたりと昨日よりは良いだろうと思ふ。しかし、僕の思いも分なわず歩き出して向むりくガスってきて、さらに雨。その雨も大粒のもので、兔岳附近では、下からの寒い風も加わってまた、そんな天気なりで、中村さんが、風のない這松の中にツエルトを張ろうとサックを降ろしたがよけい寒くなれ、体も震れると思われたので、予定通り聖平行きを了す。

そしてまた、下着まで水にぬれた

体を股線に運ぶ。

雨と風は、やすりの向も運がす三  
人を遙いたてる。それでも、まだ動  
いているほう、やすかぬ温がことを  
感じたので、体のものも口に何かいれ  
る程度のもので、どっかりと膚をお  
ろすには辛すぎた。

樹林に入つた時は、やいやいと心  
から思つた。足元の登山道は、にご  
り水が流れ、面具も、靴もそひいに  
洗われるほどだ。天  
天気がよけ小屋、聖草の美しいキ  
ス下の群落の中で、猶天の屋を仰い  
て寝られるのだろうが、今は、うす  
暗い小屋の二階で雨と風の音を身を  
包めて聞いている。

八月四日

聖小屋5:50 上河内岳の  
コル8:00 (木崎往復十五分) 茶  
白岳9:40 易走岳11:10 光岳小屋  
十分半前の水場14:40

何日かぶりで乾い朝日の光線を目  
にする。今日はなんとなく一日そちらを  
うだ。聖平のキス下の斜面が、雨の  
しづくを体にため、それが日さしと  
うけて、生き生きとしている。

聖平で中村さんと別れ、我々は、  
今日の最初の登り、上河内岳へアタ  
ックする。ここモヤロリ小屋からの  
登りは樹林帯の中、約一時間半くら  
い樹林の中を歩く。それだけ水が下  
でないを得られないのか、それだけ  
深いといえるのか。

上河内のコルの手前で雷鳥のひな  
をつかまえる。片手で握るにはちょうど  
大きすぎるくらいの奴だ、ひな  
は一匹。すぐそば一メートルくらい  
の岩の上で親が鳴いていた。俺をに  
うみつけていたようだ。すぐひなを  
離すとセ・ハーメートル然んで前方の  
松の木に入り、親は鳴きながらその後を追う。写真でみるようにならと白  
のまだら模様だ。

そこからコルまで二十分くらい、  
荷を置いて本峰往復、聖、鬼ヶ原、  
富士、中央アルプスと四方に見える  
雲が湧き出でてくる。スマップを何  
枚かとりコルにもどる。小休止

コルの下はなだらかな緩走路が南  
に伸び茶臼へと続く。光岳は霧の中  
お花畑を通り、畠縁への下りを左に  
見る。ながら茶臼岳に立つ9:40、がス、  
七時立く。霧開みたいのが降つて  
きて稜線上をなめるよう吹き降

りてくる。今日もだめかな、寒いの  
で雨具をつける。

水たまりのよう百葉色にごつた  
仁田池を左にみて、樹林帯を行く  
仁田池分岐を通過、霧毛岳につく。ビ  
ークは何の標識もなく、ここがそう  
だろうと思めれるだけである。倒木  
に苦労しながら木々の間を行く。涸  
れた沢添いに登ると、やがてその沢  
に水が現れてくる。昨日の雨のせ  
いか少し湯っているが、その水でか  
ゆいたりとめらす。

さらに上流に向かうと、光岳とで  
も名づけたいような平地に出る。先  
行パーティがそこに天幕を張つていい  
たので便道をここに泊ることにする。  
辺りは高山植物で質がひけるが、  
たまにはいいだろうと安らぎ解釣を  
する。日が差していろいろので、ショラ  
フ等を乾かし三時から食事(用意)  
シチュー! 冷(中華)、時間が余分に  
あるのと、明朝は早出をしたいので  
もうすいと昼のにヨリ飯、麦茶をつ  
くる。

七時立く。霧開みたいのが降つて  
きて稜線上をなめるよう吹き降

てやった。雨だつたら光岳は無理かも  
しれない。明日は高巻道に泊まらず  
一気に寸又峠まで下るつもりだ。と  
うとう下山の日である。

◇ ◇ ◇

雨はせみ、風もやんやり吹きとぎで  
は立派なが、中村さんとお互いの  
景事を探して別れる。いくつかのバー・ティと抜いたり抜  
けたりしながら登っていく、道は  
めぐるんで、水溜りもあり歩きにく  
い。樹林帯を抜けて一休み。昨日試  
してきた墨を初めて見る。大きくて  
か悪天へたためていたので、さき  
げんな天気だ。少し行くと上河内岳  
が目の前をふさぐ。大きな山だ。こ  
こで初めて雪山の親子に会う音をよ  
うすぐ伸ばして空はいかにも勇まし  
い。

8:00 上河内岳への分岐点に荷を  
置き、空身で登ること約七分、頂上  
は三六〇度の展望が素晴らしい。久々  
振りに見る山々は、感激もひとしお

であるが風が強く、寒くて長くはい  
られない天下。

茶臼への縦走路にあるお花畠は草  
原のような雰囲気だ。空は青く色と  
りどりの花が咲き乱れ、岳種の白が  
印象的だった。九時四十分茶臼岳に  
立つ頃からガスが入り多ケ不多に  
なる。ほとんどバーティがこの茶  
臼岳で縦走を終える。空身で光岳へ  
往復する人達でいるが、光岳で縦走  
を終えるバーティは少ない。この日  
光岳まで縦走を続けるのは、忍耐力  
を含めた三バーティであった。

茶臼を越えてダラダラの上り下り  
はここで苦にもなるが、倒木ま  
たきや倒木くぐりは数回で、立ち枯  
れの木や落葉が多い。

12:10易尾岳は、縦走路がちょうどと  
広くなっているという感じの所だ。  
樹林に間違っているので、易尾岳だ  
と覚悟いたればそこを過ぎてから大  
したたかで急登を登り始めた。  
目の前が開け、水の飛ぶる草原に翠  
び歩した。あまり気持ちは良さそうな  
のでテントを張る。今縦走中最長の  
キャンプサイトだった。

夕方になつて小雨がちらつち、夜

になると雨が降り出した。

八月五日

光岳サイトへ光岳往復  
約三十分) 6:40 百俣沢の頭 7:25

信濃側 9:20 寸又峠道 12:05 千頭  
→全谷 → 茶臼 0:57

ガスが濃く、霧雨が降っている。  
いよいよ縦走最後の日である。

6:00 出発。十分程で光岳小屋に  
着く。下さくてきれいな雙人小屋だ。  
霧雨が頭にかかる。しばし巡回の後

最後の山、光岳へ。寸又川筋道への  
道との分岐に荷を置き、六時三十分  
光岳に立つ。樹林の中のピーキーは、  
標識がなければおそらくそれとは解  
らないくらい小さい。がっかりした  
が、これで終わりだといふ安心感を  
感じる。

6:40 分岐に戻り下山開始。小さ  
な上下を繰り返しつ。確實に下つて  
いるのがうれしい。

7:30、百俣沢の頭につき、左の信  
濃側への道を行く。矢印の標識がい  
くつもあり、道もはっきりしている  
やがて信濃側へのより、今までの下  
りをすべて壁にするかのよう急登

の運続は、疲れた体をなお一層疲れさせた、極いよくな上りに失望しながら、それでも歩いて行くと、ひよっこり信濃俣に出た。もう一つ小さな上りを越えると、あとは確実な下りのみとなつた。

標識は、新しいものがいたるところにありとんどん下る。十時五十分頃、水場の標識を見る。樹林の中を雨に濡れたながら下る。と、突然、樹林がときめ目の前が明るくなつた。や、たと思う。

林道だ！

ふいに現われた林道に駆けあがりたいよなうれしこを感じながら、危な、かしい梯子を伝めて、125降り立つた。

うれしくて、ようがない。  
しかし、寸又峠までは遠い。雨が降る中、そのまま林道を歩き出す。林中、びしょ濡れだし、靴の中で雨水の滴る音がにぎやかだ。  
突然、家が遠くなつたのか、ふとんの上で寝なくてしかねない。それで今夜の夜行で帰ろうと藤田さんに戻みこんだ。その時は、寸又峠まで三、四時間だと思いついた。

ので、一時翻半ぐらい歩いて所で、寸又峠までの蓋のりを開くて、あと三十キロメートルぐらいだという。期待は、見事にはずれてしもつた。「當然」という言葉がまさにピッタリ。

何台かのすれ違つて走せてくるように輝むが、それにモニュメント、力を落として歩いていくと、二時頃、伐採工事中の小屋があつた。

中では、ストーブが赤々と燃えており、頼んであたらせてもらう。濡れた服から湯気が出る。丁度、千疊へ下るトラックがあつたので、どうにか乗せてそら、四時三十分頃、午頃へ着く。

小屋組はこれから光岳を往復するうらく空身でとびだしてきた。ちょうど心配だったが往復で三十分といふこと、最後のピークということを、我々も分岐から空身で向う。た

いした登りもなく、十五分から二十分も行くと、ちょ、と小高い丘に、先行ペーティが輪をつくっている。

我々の定えの道は、その丘を境にいて下りとなつている。  
これが光岳のピークか？

まちがいないここがピークだ。何の変哲もなく、おもしろくもないけれど、根界は樹林にこえきられて全く効かない。がっかりして分岐までも荷をかつく。

今度から最初の目標は、百俣次の

ペーティでニフニフランプがにごつた光を動かしている。出発準備に忙しそうだ。

この光岳付近にいるのは、無人小屋に泊ったペーティを加えて、三ペティだけ。我々を除けば、どちら

も六、七人。こちらは二人。他の二

隊の中間で行動することにする。こ

れがスド、ちよ、と詰めれば存在は

判らない。

頭である。そこまで約一時間三十分地図とコンパスを見比べ、標識を求めて、道らしい細い道をたどる。

頭につく、新しくつくるれた左の道（信濃屋経由）を標識に従い下るここなら急な道だ。階段ばの登り下りだ、しげが痛む。とにかくこの時間が長く感じた、いや実際長かった。ドロ道で、少々でも気をゆるめると足をとらえて滑りそうになる。下半身ドロドロ、こうなってはがつこうなどひうにでもなさである。

信濃屋からの下り口、奥秩父の山を歩いている。ただただだからとしていて、展望もきこむ。機械的に足が石・左と前に出るだけである。ただ俺たちが下つていろんだと思ふ。下界の音らしい何かの音が耳に入つてくるのを感じ、あれはトラックの音だと、枝木を切り出していろ音だ。あと腰带に想像して樂んでいる。逆にここを登るとこかのワングルバー、それに会う。枕引綱をひくような掛け声でゆくり登つて行った。そうこう荷物の上にこの登り、きついだろうなあ。

左に入根沢の水音を耳にしながらしばらく下ると、パッと林道に出る元のパークティが、カーフミラーのところで開の中休んでいる。あと四十五時間だ。我々はただ可疎温泉へと走る急坂。

この林道は、谷の一一番奥深くまで入りこんでカーブしているので、かない長いものである。山肌からにごれ雨水が、幾本も流れ落ち、沢もまた増水し、滝をつくり本流へ勢いよく流れ込んでいる。

岩林宿のバラツク小屋が、道路脇に奥在している。歩きつむ山だとこう、トラックに乗せてさらえるか瞬折、通る車に手をひろげろ。しかし車は素通りしてゆき、二本の白い線を残すばかりである。がっかりして、その白い軌跡に目をやる。それは、まわりからのにごれ雨水と混じり合いしだいに消えてゆく。

一本たてようかと思うころ、今までとは違つた立派な青と赤の屋根が見えた。それは、宮林署員の宿舎だった。長次君を林道に置いて高台の宿舎に行く。車が何台か止めてある。うまくわけは乗せてもらえないと内

心苦んで戸を開ける。だが結果は、署員はこより下には降りず、よって車に乗せてもらえないなんてとんでもない話だ。

そして二度ひっくりというか、がっかり、温泉までまだ三十キロ近く坂をありて、そのことを彼女に告げると、俺同様がつくりしたようすで、「いくぞ」といってせ乃かなみを動き出さない程であった。

七、八時出一時間がきたらとこかのバラツク小屋へもぐり込むもうといふことになった。

とにかく背岡発〇時五十七分には間に合わない

もう半分やけくそだ!!

そんな気持ちの内で、途中ストップり燃えていた小屋の中へ入つてもらいゆっくりと腰をもちつけ、くつ下などを乾かす。

そのうち、数日前、聖、光などをして歩いていたといふ人と説が合ひ、話一出す。小屋の外では、枝木を積んで、今が下へおりようとしているトラックがあつたので、その人を通

してたのんでみた。俺達が直接室町  
手にたのむより、その方がいいと思  
つたのである。

選舉では、始めは何が起つた時童  
仕がもてないかでだめだと何とか  
言っていたが、小屋の人たちに言わ  
めたので止もなく承知してくれた。  
それと、気が立つぬうちにとほか  
り、荷台に荷を放り上げ、さっと閉  
チ席にとび込んでしまった。

あさり詰らない連ちゃんだったが

道々、あれが才又嶽温泉だ。あれが  
千葉タムだと、時には車も止めてくれた  
れ、迷ケイドぶりを披露してくれた  
今日は、温泉に入らず、直接、千  
頭駅に行き、着圏へ出て東京だ。  
トランクを何トンもの重い荷にあ  
えぎながら走る駅道の長さを感じな  
がら、この道を歩いていたら、この  
辺りは明日だつたうなど、つくづ  
く思うやうだった。

感想

入山直前までは果てて全山縦走で

さるがどうか不安だ、たし、入山当初は、これがらの行程がただただ長く感じられ、重い荷に体がいつまでそつか不安だった、しかし徐々に体がなれていき、荷も日を経て軽くなり、回り五日経ると、そんな不安も自然に消えていった。

また仲間の人達と会えた時は、流れぞろれる涙うれしかった。

一つのことをあし遊歩るのは方がなが難いが、やる覚悟をもってお

「おえ、できる可能性があるといふことを体験できたのは、自分自身にないにプラスになった。」

二週間という長期間にわたる山行を経験でさる人は、少ないと思うし、今度、自分がこういった機会に恵まれたのは本当に幸運だったと思うし、仲間の協力があつたからこそ、無事にやりとげられたのだと思う。

とにかくにも、今は、一つが終りたのである。

(長次)

途中、甲府で△陽子おり、お互い激励しつつ分かれ、甲府を過ぎてあたりから、け、こうすきはじめ席に余裕がでたので眠ることにして上級前に着いた。六時頃に目がさめた、五十秒停車する放送がありで、専用室まで時刻表を借りに行き、辰野からの飯田線の連絡、伊那北からバスの連絡を調べた。伊那丸番は七時五十分であるのだが、バスの発車時刻は、六時二十分、十一時五分となる、ている。六時二十分

20

はそばや間に合わず、十一時五分では直すさる。營業所に問い合わせてみたが、そのタイヤに交わり無いとのことだった。最悪の場合二人で戸台までタクシーに乗ることを嘗悟した。

伊那北には定刻に到着した。まだ幸いにもフリーの登山者が二人いて四人でタクシーに相乗りすることになった。

八時半に伊那北駅を出發し、戸台に着いたのが、九時十分程前。運賃は三千八百二十円だった。戸台では、すぐ橋本山荘で朝食（定食三百円）をとり、荷物を整理して九時半に歩きだした。

いよいよ、これが三日間の歩きはじめてある。天気は、カラッと晴れ渡り、体調は充分だ。

戸台川に沿って広い河原を遊行していく。また、川べりに出たり、そんことを繰り返しながら、一時間半程歩くと、取扱沢合いというのがあつた。風間さんが言うには、そろそろこのあたりに角兵衛沢出合があるはずで、少しだんだらあと、横が荷物を置いて偵察に行つた。そこから十分程のところに、川

べりり下り幹に小さな角兵衛沢出合いという様式が示つてあり左岸をみると、樹木にかくれて沢らしいのが上まで続いていた。ここが出合いうい。荷物をどりにまとり、すぐにまたやつて来た。

左岸に渡り、左岸で時計を見るとちょうど二十二時だった。ここで昼食をとること。

これ小沢というのか分らないが、ケンサクにある踏跡をたよりに、ヤブニキしながら登つて行つた。角兵衛

沢と言うのは、かなり鋤岳のアプローチに使われているとまゝのに、あまり人の入った跡はないのが不思議だつた。しはうく歩いていると木に赤い布が目印として巻いあるのにぶつかつた。どうやらルートに間違はないらしい。

これは、後で今かたにてちめに計を見ると三時二十分を指している予定より一時間半程も早い。それによつて、左側から見ると、前方には大きな岩がたつて、その岩が左側を蛇のいたるそばまで続いていた。その端から見ると、前方には大きな岩がたつて、それは、岩下の岩小屋らしい。

ルートは、はつきりしておらず、

跡跡らしいものが側面を平行して続いている。今岐してしたりして、非常に分かりにくかつた。道は終始立木や草の壁な細いガレ場であり、これも沢登りかと考えさせられる様な状態であった。

その内、草木も少なくなり下向、岩がゴロゴロして、沢らしい様相が出てきた。それを過ぎると、盤が行く所のところから危険の道に出た。

這々と一歩進まず、ライラーカ噴石側から水の音が聞こえてくる。よく見ると、前方には大きな岩がたつて、その岩が左側を蛇のいたるそばまで続いていた。その端から見ると、前方には大きな岩がたつて、それは、岩下の岩小屋らしい。時計を見ると三時二十分を指している予定より一時間半程も早い。それによつて、左側から見ると、前方には大きな岩がたつて、それは、岩下の岩小屋らしい。ここでは左側にあるのがおかしい。しかし、左上の窓の上部はハンゲーじ岩があおりがふさり、岩小屋を作っている。くりあえず荷物をそこに置き二人で傍茶に行つた。岩は全体

がハンターで、何ヶ所か岩小屋らしい所もあり、そこには必ずギヤンパーで跡があつた。岩は非常にものく、手で剥そよと剥えは簡単に剥れた。足元に落石がゴロゴロしているのを見るに、とてもこんな所では眠らないと思つた。  
迷を歸から歸るまで歩いたが、地図に記してある場所はもちろん、どこを探しても抜け道がない。どうやら道を違つたらしい。ルートがない以上それは駄かだった。しかしよく似た所もあるものだと二人で感じし下。

時刻は四時半度である。ホリタンに水を満喰にして、すぐ来た道を引こうとした。とりあえず、迷中あつた「角兵衛のコルヘ」と言う標識まで走ることである。そう思いついで下りてありて行つたが、下りて小雨が降つて岩が濡れて走り何度も滑つてこうか。左側は斜面にみまわれた水たまりも今からないまま、ただ下り続けるとやつと赤い布の目印のある登山道に出た。時刻は五時である。

本日の宿泊地台川がすぐそばに見えた。

林の中をすぐその道を通りぬけ、すこしに「角兵衛のコルヘ」の標識を通った。そのまま行くと奥

十一月六日 六合の岩小屋

おぼえのあら丸木が倒たのつていた石側にはハツカリしたルートが夏本の手前から今残っている。軽々はたしかにこのルートを行つて、いか

し、その丸木をよく見ると滑り止めの溝が刻んであり、丸木を越えた左側にはルートが続いている。人々

は、ここで躊躇した。そこから益は林の中へとて行って、時刻も遅くなる。たせいが遅延くたつた。二人供かなりつかれていだ。

角兵衛の岩小屋に着いたのは、六時十分前であつた。たいした岩は見当つたが、予定通りここでひバーカーだ。平らな湯宿がなく、進むかた、大斜面にツェルトを張つた簡単にはパンで食事をとりすぐに寝たあとで地図を見ると、れどのところからおはにんつていうつこういことか分つた。ここで渓山の人が脚を運んでいるふうである。

これから先、六合の岩小屋まで、水がいいので、少しでもなまらくなれるため旅人を飲んでなかつた。三合七分の酒を全く捨て水につめ替えて、ガイドブックだと、下巻下の岩小屋からコルヘは一時間半であった。だが、実際、とてもそんなじがではなかつて、広い湯宿だらけりがし

た。朝八時に眼をささと、エリトはつれていた。雨が階、廊下を下を軽く、汗で食事などつた。下巻下の岩小屋まで水がないので、約一ヶ月にはルートが続いている。人々

は、ここで躊躇した。そこから益は林の中へとて行って、時刻も遅くなる。たせいが遅延くたつた。二人供かなりつかれていだ。

七時過ぎに登った。一はうくは林の中を歩き、その内がし湯に出たが、イドフークに見る通りがしゃが広くなつた。すこそりとがんじり屋である。時刻は八時三十分、水宿のすぐ前に平らな湯宿がいくつかあり、時時モチャンブーした跡があつた。朝小が行く。充分に食事ができなかつた。ここを再び食事などをつた。

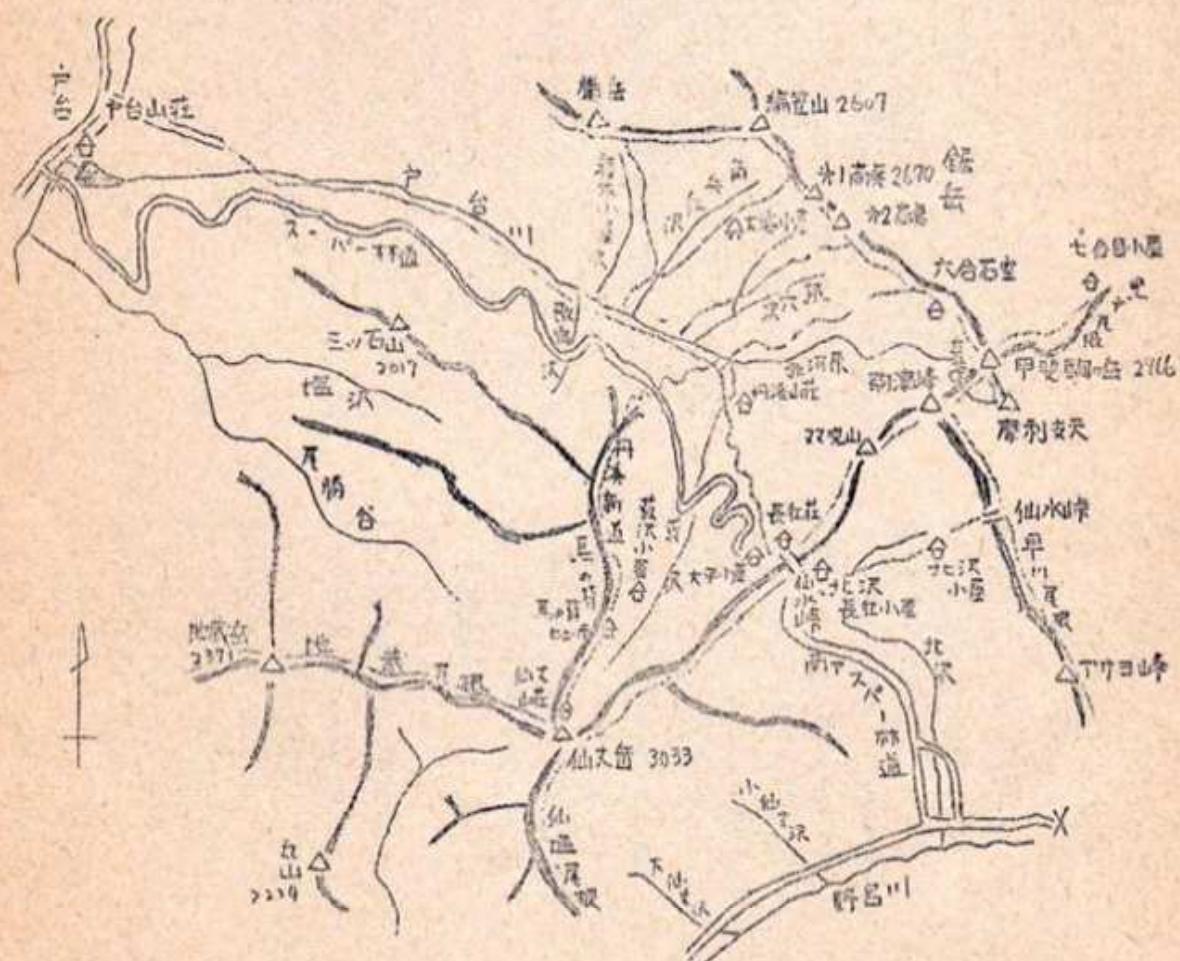
これから先、六合の岩小屋まで、水がいいので、少しでもなまらくなれるため旅人を飲んでなかつた。三合七分の酒を全く捨て水につめ替えて、ガイドブックだと、下巻下の岩小屋からコルヘは一時間半であった。だが、実際、とてもそんなじがではなかつて、広い湯宿だらけりがし

場をじゅつたい程、ゆっくりした足  
とリで進きなければならなかつた。  
しかも、すぐルートは洞えてしまい  
との度毎に宿舎が運転だつた。  
我々のルートファインディングも悪  
いかもしれないが、實に命たりにく  
い道であつた。

小谷、名小さな角筈箭アシハシ山へと続く飯  
岳の麓底である。

キレソト状の細い尾根を上り下り  
一方から行くと、やがて高さ十米程  
の岩場の上に出た。そこには、シユ  
リンケがハーケンに結びつけられて  
いた及川側の斜面を登る。再び  
尾根に出で、すくそこがヤ一商店で  
ある。そこはそのままで通り、そ  
のまゝ尾根を行く。途中、底穴を横  
目に見て、標識とあり奥進行く。三  
十分程行くとヒークに立つた。及川  
側には、ヒークの直線距離五十米程  
の竹に、やはりヒークがあつた。地  
図を見ると、自り前が神二高峠、我

### 鶴岳～仙丈岳概念図



々の居る所がヤ三高寒であることがすぐめが、夜、ぐらに地図をよく見ると、巣穴からヤ三高寒を通らずにヤ二高寒へ至る巻き道があつた。しかし我々は引て返すにこなま道を進むことにした。

谷の内側の斜面を筋ほいになつて追み、シユーリンケのかがつている岩場の上に出る。荷物をそこにつうしてあつて引て先におろし、懸垂をして降りて、巣巣は初めてであり、しかも丁ツカツを着ていたため、右直角に下さるみかずほのヤケども作つてしまつた。

下降して石に下つていくと、すぐには4ムニ枚の岩場があり、登れとう旨氣がいたので、そこを行くことにした。そふる下つて行けば巻き道であり、岩から三米程の高所を到不して、そふる下つて行けば巻き道に出るのは明らかである。だが、時内が惜しかつたのである。

一ヶしながら思つてよりさつく、アアミを取り出しやつと奪り戻さることができた。そこからヤ二高寒はすぐであり、ゼークに立つたりが14時だった。ヤ三高寒から一時間たつて、中津東越、巣穴派出所を過ぎて、行つたが、巣穴の頭を試えて三ツ頭の巻りにハーカかつて頃、金中産業をそれで鳥帽子山側の巻き道に出てしまつた。地図には、ここからは入らない方がよいと書いてあるとのを知っていたが、比較的遅かしつかりしていだので、そのまま續けて行くことにした。しかし、なんだん道が細くなり、はつたりした目印もなくなくて、こういには完全に道は消えてしまつた。このまま行くには道が今からず、巣巣にても下で六時であるある。時間がない。巣巣には道があるはずであるから、このまま巣巣するのか早道だと判断した。

しかし、そこはそのすごい立木であり、巣から三米程の高所を到不して、古木をたよりにしながら登って行つた。すでに疲労回復している二人には、時間の経過と感じるつてとてもこなえた。結局、尾根に出たのは7時であり、ヤフーキ、直登に、実際に一日は、時間の経過と感じるつてとてもこなえた。昨日の様な巣小舎を想像していた僕にとって、巣巣があり、甲は広くて平らなりを見ると、まるで天国の様な気さえした。昨日からまとまる食事をしていないうちでせめて今日はと嬉しい僕がホリタンニフに水をいよいよ取つて来た。瘦れていたが、あまりはかぢらなかつた。小舎の中はすでに三組のパーティが入つていて我々をライトで迎えてくれたが、すでに寝てしまつてゐる。我々も寝ることにした。昨日は十一

ないことになつた。

途中、見頃のよい所に出た時は、まだ遠い岩小舎に灯がちらついていた。どうとう感電を出さなくては良くなかった。僕はインボロウン等を入れ替えたにもかかわらず、力づけ方に程暗く、しかも振動をすぐ消えがかつた。充分注ぎ度も遅に迷いくたくたになりながら真暗な道を歩き航けた。岩小舎の光が下さくなり、人の声が下さない、だと今、大時はホツとした。

橋間：今日は十三時頃孚をいた。アモつうい二月頃であるが、明日は二人ともこのめない様に願ひたい。

今日、ここに泊まつた以上当然、当初の予定であつた仙丈岳の登山はやめなければならなかつた。天、渡小国きていろせいいかえつて眠れず10時半頃うぶ歸をしていた。

七月二十六日

二十六日 出發 7-15  
駒澤崎 10:00  
仙水崎 駒?

30	14	10
10	45	
新宿	北沢峰	115
27	芦台	15
30	45	
	伊那市	17
	丹波山莊	

朝、五時四十五分に起ると、す  
ぐに他リパーティは出発して一さ  
でいた。小倉から出ると、空は真青  
で實にいい日だ。今日ひにかいっこ  
とありそな気がする。すぐ小倉第  
二し、箭をかたすけて、7時に出発  
した。昨日の水が太分残っていたの  
を取りに行かなが、た。

甲斐駒ヶ岳登りは、がし場と右陽のはつこりしたルートである。8:30 頂上に着いた。頂上はかなり広く、色々な団体が活動している人は多い。

いろにちうどくお出でる御茶山いた。  
沢に入りてむら今さで、志小合の人たちに会つてだけだ。それから、ここでこのだけの人がいるのも見る。  
とても今まで横の山に入つていたとは思えなか、大、頂上では林場に見えぬ。樹木も山が常に鮮ぐで、風面で人を色々見てもらつてこながで  
きた。頂上で軽く茶うどを食べ、食事に駄菓子、向けて出資した、の勾配をさがし始めた。それが終點たて長  
ま芋。今日は道に迷わないだらう

人に戸曾からタバコを發着所別を聞  
くと五十七年である。い、領分のあ  
との手紙を發しておがうゆきくりした。  
福井丸駆りうの利通と謂へよう。と  
思ふ。前刻表を廻り、それによろ  
とが当番で時三十分の余程に並るに  
は、伊那丸を五時二十五分に集う。それ  
はさうない。並び半のバスでは少  
なくてモクワシ一と時五時四十九分  
約曲で五時を過ぎて西郷に着いて  
いなくてはならぬ。中葉に、藤原  
ひのでカトランシーバーと午前を預  
けて(預期は失敗しかつた)、す  
ぐ出発した、前刻ほ二時である。

風向さんが庭にマメ豆作って早く  
やむなか、たりで、取りあえず僕が  
皆に行って、タクシーを呼んでおく  
ことにした。カンカン駆りの河原を  
汗だくになつて歩き、戸台に着いた  
のが午時半を过了た。のんびり歩  
いていつた往路は、結構長く感じ  
なかつたが、一気に歩き通すとは外  
に長いやう。

お前に着く直前に、駒ヶ岳で会つ  
た三人組の女の方に再び会い、おで

幸如に驚く西郷に、鞠ヶ岳で会つた三人組の女の方に再び会い、おせ平五人集めることができ、すぐにつくつこでコールし、田舎ユースを

飲んで三日ぶりの下界の時にはだつた。こゝ以上歩く必要がないと思うとホッとする。

田舎過ぎタクシーが来てすぐ出発した。伊那北駅五時二十五分から充分向に思うと思っていたのだが、途中

タイヤのパンクや町中へ入ったのを源等があつて五時二十分には向に合いそうもなくなつた。予定を変更して伊那市駅まで行くことにした。伊那市駅は急行が停車十九分で六時違なかつないのである。

伊那市駅には五時半に到着した。

## 前穂高岳北尾根より

### 合宿へ

参加者

皆鶴

渋谷光人

和田武

昭和三一年四月二十九日(月)

上高尾八分→新羽瀬二時

奥又白谷乗越尾根取付一四時

(油)

四月三十日(月) 席原

五月一日(月) 席原

席原

五月二日(月)

取付五時三十分→北尾根稜  
線八時三十分→前脇頂上一  
六時→曾沢ベースキャンプ

一七時

前穂高岳のピークを私は、曾沢をいと通り皮に被める時、その嶮い岩峰にむかひ、一度は登って見たいという気持ちにかられていた。それが今日の合宿で雨に悩まざれながら成し遂げることができたことをここに報告する。

運賃は以外と安く三千八百六十円であり伊那北まで行くのとほとんどかわらない。列車の発車時刻まで向かうもなくなつた。予定を変更して伊那市駅まで行くことにした。日曜日だ。天せいであり全員ひたり新宿まで走って行くことがでやつて、新宿には十時半に着いた。(記・石井)

二九日、私達二人は、上高比より  
入出したが、扇が降つており、前橋  
はまろか、朝霧、山次きて、ガスの  
中でせんさん見えない。

機械の先の行方知らず、渡り、芦川と  
別れ又ヨリのガレを通り、品川へ行く  
その内、ガスが切れ、跡を見ること  
しほく、明日は、晴れさちかいなし  
と思ひながら、又自転車高ラン  
ゼと計画の取扱でツエルトを表。氏  
ダ食は、明日のために、スマミント料  
理ごしやれ、半めに才ませて寝るこ  
とにした。

翌三〇日、四時、雨止みたが、扇一、  
雨でツエルトの中まで水が入り、み  
涙る一ヶ月、五時出発になるつていた  
が出来、さうきらく、停滞、次いで雨  
も半後になつて、小降りになり、外へ出  
ることができ天。

重くよどんだガスの切れ向かう東  
屋が、扇を出で、また、扇又自転車のす  
つきじい雪崩の跡は、自然の力の恐  
ろしさをさまで、と見て、つづられた

五月一日、今日もまた、晴れと同様  
節しい雨、停滞が二日続く、三人と

も雪がいらだつて来た、ツエルトは  
チシラチシヨ、今まで浸透した雨水  
は、寝具、帳張りでぬらす。

三人内のソエントのせいか、少々

すきて、ぶつかる、その度「もうツ

エルトの口はいぐで、雨の中でも上

高やこて下ろう」と、ほやく、私も

おじは公の人たちが、岳沢ベースに

入山する日だと見うと、下山して岳  
沢にて、ても良いと、見いだが、うり天  
しか、さすがに、ターフ、明日はか  
ならず晴れる、待て、あと一日待て  
しと、よく言ひきる。

雨にこの日、一日は降らなかつた  
午後には、晴天が現を出す、私た  
ちも外での小物を洗かしたり、室内

を撮つたり、アサヒ、  
この二日間の停滯は、平地の十日  
にも半になつて、小降りになり、外へ出  
ることができ天。

重くよどんだガスの切れ向かう東  
屋が、扇を出で、また、扇又自転車のす  
つきじい雪崩の跡は、自然の力の恐  
ろしさをさまで、と見て、つづられた

いまいよ出発の時が来た、空は青  
空と頭が残り、終始の意を日和だ。  
四時、早めに、朝食をすませ、五時  
二〇分テント場を出発、ガレを踏

めた、雪渓が残つてあり、登りやす  
かったが、マイスバーンに向つてい  
るが、注目、注視しながら詰めた。尾  
根が今改めまでは、何なく乗たが、  
そ小かうが詰いかつた。

退屈だ、た二日間がつその聲だ。

五月とは言ひ、鹿尾根はまだ雪の

下で苦労した。  
北尾根の稜線の今岐奥はハ母三〇  
分、ここまで来たて、見いつつ目です  
頂上は、まだはるか遠く、一ヶし  
枝線から、パノラマは、実に美しく  
い、冬合宿で苦労して登、た確は、  
ど、一リとて、三角形の標先は見

事だ、それに、渓流のテントサイト、  
さゆいだ、白い布に色彩を切つて張  
た見たいた、教えられないテント  
すい分人が入つて入る、北懸沢・サ  
イテックラード、ともに、城の壁に人  
か行列となつているのが見える。

すはうーいとは言い、あまり長居  
はできない、今日中に岳沢ベースに  
着くなくてはならぬ、先をいそぎ  
方くては……。  
ナイフリッシュかう岩板を登ると、七  
峰だ、七峰、六峰は何なく通過、雪  
渓半ヒリの小さいアッセンユに抱き

ながら寝る。男性に限って女性が何とか登っている。實いサックを負って大半を出でて登っている。あれめのは一休みすることにした。一か一水筒の水は道、石避けにタバコは燃し、水筒に雪を入れて振って飲むにはならないが、がマン、ガマン五峰も何なく通過。四峰からは、アツユもなくなり傾斜が強い。なんとなく登りにくそうなのだ。ここからはサイルをつけ、コンテニアスで行くことにしたが、あまり進めないのでサイルをはずして登った。

登るにつれ、東壁が大きく見える。今日は一人を取り付いていない様だ。苦しいせいか「登りきると休めるのでは」と考えるようになつた。二、三峰ぐらい前方が頂上では、しかし、まだまだらしい。

さて、三峰だ。下から見るとそんないに登りにくそうであるが、ここが北尾根の放心部らしい。大きな岩が、かくちり合っている間に通り抜けたりの空洞だ。しかし、力を振りしほり何とかかんとく通過。まだ前方にいくつが見える、なん

たが、けつソリした。

三枚の顔で小林正、だが水がない  
ので口が乾いて熱い、さて出来、首  
中の汗を拭ぎまく、肩に手を込める。  
二枚の髪に髪を取るアソーフリック  
ジで、今にも崩れそつて、顔面に落  
る、ここのらのハフニース・ロフニ  
ースは熱いんだめだ、光が壁に当り  
輝いている。

様な事で「おめでとう」と入る。  
一路岳沢へと急いた、奥州神沢を  
アリセードで下る。アツという向に  
岳沢ベース・梵草の面々が迎えに出  
てくれた。  
「うれしか、た」  
その夜は、みんなで瓶いの酒で  
九時頃まで話かはすんだ。

閻根記

奧穗高岳 南稜

(二) -

卷之二

南風沼

五月三日

五時起床、六時三十分無理不怠め  
がけて出発。

大滝の左より快適な雪氷を登る、  
氷もなく雪煙翠に変り、そして、  
トリコニーの岩場につく、壁自体は  
雪に埋めてニピュナで終つて、こうう  
それから、雪被が茶き、またたく間に

上りで十五分ぐらいだ。  
私自身、奥飛原上に立つことは、  
初めてだつたが、天候が悪いわと  
ガスで回りが見えないせいか、あま  
りその実感が出なかつた。  
十分くらい小休止した後、奥飛原よ  
り西尾根を経て前飛へ、前飛の頂上  
が、十二時だつたりで、ベースにト  
ランサーべーを入れる。そして奥明  
神沢へと急いだ。だが、昨日と違い  
ガスで視界が悪くて道を勘違えてし  
まった。  
奥明神沢へ行くつもりが一つ手前  
の下と下つてゐる。やむなく重下部  
新道を下る。この道は昨日教えても  
らつたので自信があつた。しかし、  
走違と同じ道を采れた人達が二人いて  
私達のバーテイの後に付いた。  
重下仰新道を、十分ぐうい下りた  
時である。私の後でアツという声を  
聞いてふり返ると、一人が前飛高沢  
へ滑つて行く。すぐ大聲で「滑落停  
止だ」と叫んだが、その人はもうチ  
のほし、滑ることにさがうねず。  
次をソリのようく滑つて行つた。  
私も、こんなこと初めてなので、

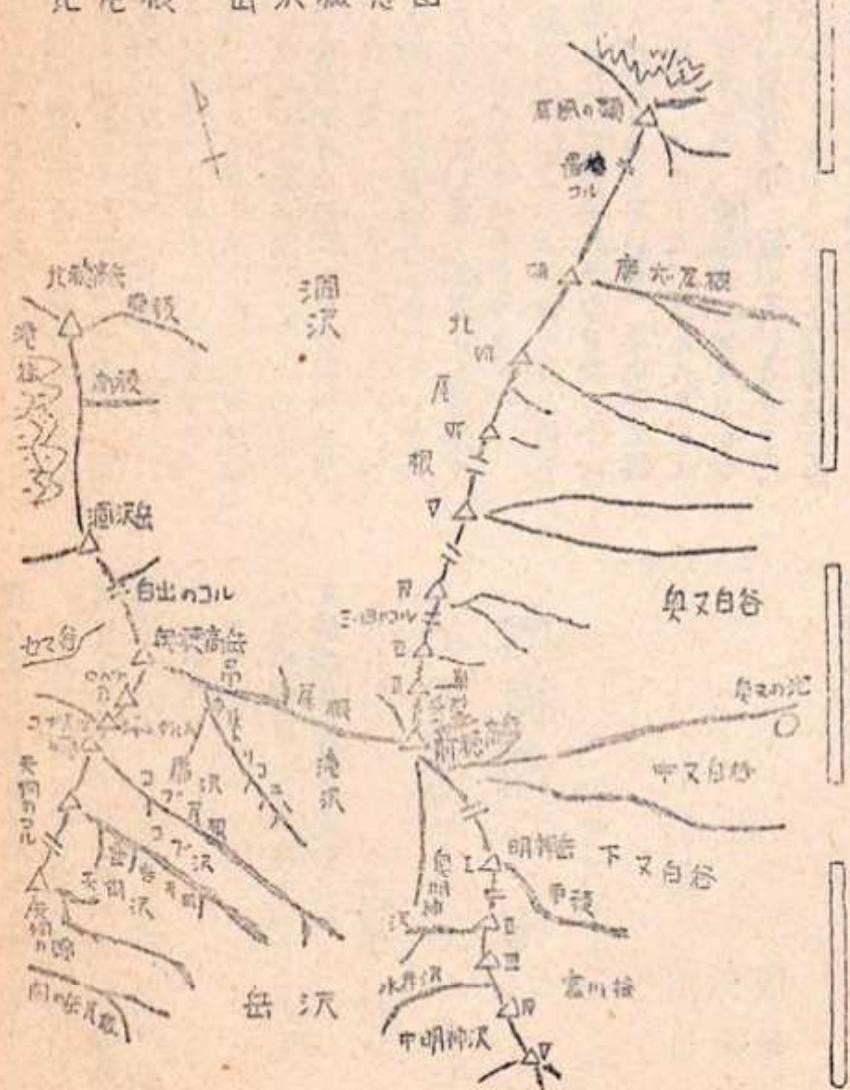
最初は、ヨゴモごしていたが、すぐ  
トランシーバーで警笛を発射した人を  
か七〇・七に局にゐることができた。

この教訓をじにきぐみ、自分もあ  
のようにならうとい葛王竟したい。  
(尚記 記)

その後は、我々も、ありのようにならぬよう、細心の注意を以つて無事下山することができた。

後で聞いたが、その人は雪舟で松本の病院へ運ばれたとか

タイム  
岳沢 B.C. 6.30 — 奥穂高取付 7  
00 — 頂上 9.40 — 前穂口 60 —  
岳沢 B.C. 13.40



昭和五十一年

## 春合宿 総括

参加者 吉野 武

中村 博明  
沼田 昭三  
南 茂人  
洪谷 進  
周間 和雄  
肉根

当初、岳沢と利尻岳との二隊に分かれて泰山合宿を実施する予定であったが、参加者の都合で岳沢集中ということに変更された。

参加者は、入山日次の部会で三隊に分かれての行動となり、最終的に岳沢へ合流するという計画になつた

（A隊へ慶応尾根、B隊へ尾根、C隊へ岳沢）吉野、森谷、肉根の三名で、

四月二十九日入山、慶応尾根をすこし登ったところで雨りの行動中止。その後二日自便滞し、五月二日待望の晴れに早朝出發して、その日十八時前岳沢ベース到着。

時前岳沢ベース到着。

B隊（前園子定、明神東教、前川一岳沢）、中村、沼田、南。

五月一日入山、早朝より大雨で車

は泥濘までしがへうず、泥濘より徒歩、屋前上高地へ着いたが、当初の計画は放棄し直撃岳沢へ十六時到着

五月二日は、天候に恵まれ、中村、沼田で、天狗沢を登りコア尾根の頭まで。

また、周間が六人用テントを担いで岳沢へ入った。

以上のようにして、五月二日十八時、泰山合宿参加者七名が顔を揃えた。

五月三日、雨が止み、沼田、周間、吉野、中村でコア尾根へ向った。

トリコニー高は、奥深、前林の頂上を踏んで重木を踏破して下山、途中三名の猿を走りついで草抜登山者が前林沢へ滑落、三名は慎重に下り、岳沢ヒュッテへ集合、十四時過ぎベースへ帰る。

コア尾根隊は、株山部での順番待ちで時間で喰い、コア尾根の頭に十時過ぎ到着、天狗沢を下って十五

時三十分ベースへ戻る。

オフ、南、沼田の二名は、天狗沢を登つて天狗のコルまで登過ぎ帰来

全員ベースへ戻ったところで、天幕前でストーブを囲み、メサシと有

に話の花が咲く、花が咲き過ぎたせ

いか一名ダウン。天幕に入り翌日の行動について話し合うが、天

候が気になり、天氣次第といふことで寝袋に入った。

五月四日、前日よりヒドイ天氣、全員返家のうち下山の支度にかかり

る。

◇ ◇ ◇

今回合宿は、昨年より雪が少くなく十一の上に天幕を張れどもあり、天候は床耳同静間にたられ、B隊は当初の計画を放棄、A隊も二日半程ツエルトにとじ込められた、このよう床耳台地で岳沢へ集結しても満足のいく琴葉がでらなかった。しかし及ばず、全員安事下山で、ここは新聞紙上にさわった事改は当会になによりの成果ではないかと思う。

オフ、入山時に雨に降らぬかということは、走行が半減してしまい、合宿生若の乗車へがくら見てまうづだ。

昭和五十年度 冬山合宿

# 北ア 中崎毛根と槍レ兵

50・12・28 ～ 51・1・2

十二月二十九日（水二日） 晴

→ 落天

奥丸山手前と槍局の小屋

3..00 駐床、朝食

3..35 出発

4..00 大休止。（ニニヨリは無風

4..30 岩陰で小休止。ソーセー

5..00 ジ分配

5..30 千丈泉頭、強風荒天

6..00 槍局の小屋

6..35 夕食、ヘンケンオトコ

7..00 ハン

7..30 宿喫

8..00 夕食、（ケンケンオトコ

8..30 ハン）

9..00 夕食、（ケンケンオトコ

9..30 ハン）

10..00 夕食、（ケンケンオトコ

10..30 ハン）

11..00 夕食、（ケンケンオトコ

11..30 ハン）

12..00 夕食、（ケンケンオトコ

12..30 ハン）

13..00 夕食、（ケンケンオトコ

13..30 ハン）

14..00 夕食、（ケンケンオトコ

14..30 ハン）

15..00 夕食、（ケンケンオトコ

15..30 ハン）

16..00 夕食、（ケンケンオトコ

16..30 ハン）

17..00 夕食、（ケンケンオトコ

17..30 ハン）

18..00 夕食、（ケンケンオトコ

18..30 ハン）

19..00 夕食、（ケンケンオトコ

19..30 ハン）

20..00 夕食、（ケンケンオトコ

20..30 ハン）

21..00 夕食、（ケンケンオトコ

21..30 ハン）

22..00 夕食、（ケンケンオトコ

22..30 ハン）

23..00 夕食、（ケンケンオトコ

23..30 ハン）

24..00 夕食、（ケンケンオトコ

24..30 ハン）

25..00 夕食、（ケンケンオトコ

25..30 ハン）

26..00 夕食、（ケンケンオトコ

26..30 ハン）

27..00 夕食、（ケンケンオトコ

27..30 ハン）

28..00 夕食、（ケンケンオトコ

28..30 ハン）

29..00 夕食、（ケンケンオトコ

29..30 ハン）

30..00 夕食、（ケンケンオトコ

30..30 ハン）

31..00 夕食、（ケンケンオトコ

31..30 ハン）

32..00 夕食、（ケンケンオトコ

32..30 ハン）

33..00 夕食、（ケンケンオトコ

33..30 ハン）

34..00 夕食、（ケンケンオトコ

34..30 ハン）

35..00 夕食、（ケンケンオトコ

35..30 ハン）

36..00 夕食、（ケンケンオトコ

36..30 ハン）

37..00 夕食、（ケンケンオトコ

37..30 ハン）

38..00 夕食、（ケンケンオトコ

38..30 ハン）

39..00 夕食、（ケンケンオトコ

39..30 ハン）

40..00 夕食、（ケンケンオトコ

40..30 ハン）

41..00 夕食、（ケンケンオトコ

41..30 ハン）

42..00 夕食、（ケンケンオトコ

42..30 ハン）

43..00 夕食、（ケンケンオトコ

43..30 ハン）

44..00 夕食、（ケンケンオトコ

44..30 ハン）

45..00 夕食、（ケンケンオトコ

45..30 ハン）

46..00 夕食、（ケンケンオトコ

46..30 ハン）

47..00 夕食、（ケンケンオトコ

47..30 ハン）

48..00 夕食、（ケンケンオトコ

48..30 ハン）

49..00 夕食、（ケンケンオトコ

49..30 ハン）

50..00 夕食、（ケンケンオトコ

50..30 ハン）

51..00 夕食、（ケンケンオトコ

51..30 ハン）

52..00 夕食、（ケンケンオトコ

52..30 ハン）

53..00 夕食、（ケンケンオトコ

53..30 ハン）

54..00 夕食、（ケンケンオトコ

54..30 ハン）

55..00 夕食、（ケンケンオトコ

55..30 ハン）

56..00 夕食、（ケンケンオトコ

56..30 ハン）

57..00 夕食、（ケンケンオトコ

57..30 ハン）

58..00 夕食、（ケンケンオトコ

58..30 ハン）

59..00 夕食、（ケンケンオトコ

59..30 ハン）

60..00 夕食、（ケンケンオトコ

60..30 ハン）

61..00 夕食、（ケンケンオトコ

61..30 ハン）

62..00 夕食、（ケンケンオトコ

62..30 ハン）

63..00 夕食、（ケンケンオトコ

63..30 ハン）

64..00 夕食、（ケンケンオトコ

64..30 ハン）

65..00 夕食、（ケンケンオトコ

65..30 ハン）

66..00 夕食、（ケンケンオトコ

66..30 ハン）

67..00 夕食、（ケンケンオトコ

67..30 ハン）

68..00 夕食、（ケンケンオトコ

68..30 ハン）

69..00 夕食、（ケンケンオトコ

69..30 ハン）

70..00 夕食、（ケンケンオトコ

70..30 ハン）

71..00 夕食、（ケンケンオトコ

71..30 ハン）

72..00 夕食、（ケンケンオトコ

72..30 ハン）

73..00 夕食、（ケンケンオトコ

73..30 ハン）

74..00 夕食、（ケンケンオトコ

74..30 ハン）

75..00 夕食、（ケンケンオトコ

75..30 ハン）

76..00 夕食、（ケンケンオトコ

76..30 ハン）

77..00 夕食、（ケンケンオトコ

77..30 ハン）

78..00 夕食、（ケンケンオトコ

78..30 ハン）

79..00 夕食、（ケンケンオトコ

79..30 ハン）

80..00 夕食、（ケンケンオトコ

80..30 ハン）

81..00 夕食、（ケンケンオトコ

81..30 ハン）

82..00 夕食、（ケンケンオトコ

82..30 ハン）

83..00 夕食、（ケンケンオトコ

83..30 ハン）

84..00 夕食、（ケンケンオトコ

84..30 ハン）

85..00 夕食、（ケンケンオトコ

85..30 ハン）

86..00 夕食、（ケンケンオトコ

86..30 ハン）

87..00 夕食、（ケンケンオトコ

87..30 ハン）

88..00 夕食、（ケンケンオトコ

88..30 ハン）

89..00 夕食、（ケンケンオトコ

89..30 ハン）

90..00 夕食、（ケンケンオトコ

90..30 ハン）

91..00 夕食、（ケンケンオトコ

91..30 ハン）

92..00 夕食、（ケンケンオトコ

92..30 ハン）

93..00 夕食、（ケンケンオトコ

93..30 ハン）

94..00 夕食、（ケンケンオトコ

94..30 ハン）

95..00 夕食、（ケンケンオトコ

95..30 ハン）

96..00 夕食、（ケンケンオトコ

96..30 ハン）

97..00 夕食、（ケンケンオトコ

97..30 ハン）

98..00 夕食、（ケンケンオトコ

98..30 ハン）

99..00 夕食、（ケンケンオトコ

99..30 ハン）

100..00 夕食、（ケンケンオトコ

100..30 ハン）

101..00 夕食、（ケンケンオトコ

101..30 ハン）

102..00 夕食、（ケンケンオトコ

102..30 ハン）

103..00 夕食、（ケンケンオトコ

103..30 ハン）

104..00 夕食、（ケンケンオトコ

104..30 ハン）

105..00 夕食、（ケンケンオトコ

105..30 ハン）

106..00 夕食、（ケンケンオトコ

106..30 ハン）

107..00 夕食、（ケンケンオトコ

107..30 ハン）

108..00 夕食、（ケンケンオトコ

108..30 ハン）

109..00 夕食、（ケンケンオトコ

109..30 ハン）

110..00 夕食、（ケンケンオトコ

110..30 ハン）

111..00 夕食、（ケンケンオトコ

111..30 ハン）

112..00 夕食、（ケンケンオトコ

112..30 ハン）

113..00 夕食、（ケンケンオトコ

113..30 ハン）

114..00 夕食、（ケンケンオトコ

114..30 ハン）

115..00 夕食、（ケンケンオトコ

115..30 ハン）

116..00 夕食、（ケンケンオトコ

116..30 ハン）

117..00 夕食、（ケンケンオトコ

117..30 ハン）

118..00 夕食、（ケンケンオトコ

118

11	11	10	9	8	6	5	..	20	18
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
50	00	00	10	30	30	00	..	00	00
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木村小屋	御神社	御神社	出発	出発	出発	出発	（るこ）	荒渡	夕食

報  
告

卷之三

山が恋らしくと覺やかさの面倒を見せつけられた山行であった。  
初日は、トレイスのついた中崎尾根を登ったのであるが、無風快晴でこれが冬山かと思われるくうい感じであった。  
ここうが二日目の午後から天気は荒れ出した。朝うちには、樹林界を越えて見晴らしのいい尾根を、みんなが思ひ思いに歩きを進めたが、いざ丈木峠に出で見ると、富山側からの善風もさとそと吹けるハメになる。  
天氣も、先ほどの快晴はどこえやら、いづり向たかどす黒い雲にふぶ

わいてしまっていた。そいかう槍の肩までの長さ、たことくるしかったこと、くたばつて身体を休めるにも吹き、さらでは休むことをやめない、一度だけみんなして岩間に休むことができたが、すぐさま強風下の雪の急傾斜にいざゆはならなかつた。入山二日目の重たい荷物を背負つての急登にはみんながコタエた。隊列もここでバラバラになってしまった。同時に半道までにぎりぎりの小屋にだどりつることができた。

この荒天は、翌日も続いた。三日目はこの小屋で停滞することにした。幸運にも停滞は一日でした。入山四日目の朝はまだ荒れ模様であったが、晴れがスに切れ向か見られただけで決行することにし、ハンドロードを下りて頂上にまで出発した。確実に雪の跡のような地形なものだから、迷風にいよいよあしゃれてしまふ。吹きだまりの雪がケチラされてほほに当ってくる。文字通り針にさめたようにならざるに痛む。目などあいていられない。中田さんなどは、目出帽を序目だけあけてがんばった。川俣さんにしても、こういうとこにこそ

威力を發揮するのである。たゞ一千  
ラ製のゴーナルが全く役立らず、や  
はりガラスがくもってしまって、せ  
つかくの五十円もマイになってしまった。

十二月三十一日、八時五十分、  
全員、槍ヶ岳頂上に立つ。今回のみ  
標は立せられぬ。

記念撮影をして下山。さす小屋まで、小屋で荷物を貯貯いなみして、横尾尾根を走る。天気は、途中から完全にあがつた。風もなく青空が広がつた。みんなウキウキ、ちかハシャギ、なかには横尾尾根からのくだりで、プロンゴロンこうげまわるものもいた。今頃はだつてになつて、も冷めたくほのかつた。

四時すぎ、横尾着。ただうにテント設営、今日は下みとケだというのに酒は店を尽きかけていた。やもなく吉田千一郎による配給制となる。岩谷さんが、ウチにヨリモかけて三平汁をつくつてくれた。あんまりうまかったので、どうとうごはんには淇芋をつけずじまいであった。スリぶりに十二時まで紅白歌合戦などをして、夜半を禁じんだ。

宿泊五十一年一月一日は、今回の冬山登頂終了日である。入山五日目である。下しるこで正月気分を味めつて、沢渡までスタートを切、ゆつて、沢渡までカストートを切、途中十一時半に木村小屋に寄り一休み。なんでも来年にはこの小屋はなく居つてしまふそうだ。今、壁間にさすすめている帝国ホテルができあがると、木村小屋は必要なくなつてしまふ。云々の冬そこまでやつがいになつていろし、複雑な氣持である。

さうの回後、天気は、ますます晴れ、空にはひときけらの雲もなく抜けようの音さである。このまま歩けばではモッたいないで、沢渡へくれトンネル入口で一休み。道筋にサツツを投げ出し、散をめざ取下もぬいで白くふやけ天足をさらけ立つ。ここで元気を取り戻したのが、沢渡氏と鈴鹿氏が競争を始めた。沢渡まで駆けた結果は沢渡氏の勝ち。  
翌朝、明治神宮へ初もうでをしようとして、七時半で門を開けないといふので神宮前で解散することにした。

「みちさん、大変おつかれさまでした」



の日つきは、お互いをケンセイしあつたり裏剣そのもの、出来上がりたベは、ハシタ集中攻撃を受けて、まだたく間にカラップボ、こりすゞまじさは、ハゲタカ君もござビックリといつて、ところである。

ハ時五十分の例の新宿行キードン行に乗り込む。

## 参加者の顔

うとうしく晴天一

沼田昭三 穏やかに處つたとき、

中田弘 長老、どんな時でも表情

情とくすぐりを強調に出る人。

絶対十二月三十日は、局の小屋で停泊する、とか、一時は、全員の荷物を小屋の外に出させ、寝床の効かない吹雪雪の中について出

ようとした。

タオルで顔がありをして、ヤツケタフードをかぶったが、風に吹きさつさられて役立たず、

河の島、姫アイタサは志めようにやめたからめまい、

吉田義一 チーフリーダー、我々のためにテレモスを山に拝げてく

れた人。

二年前は、五竜岳バトランシーバーを奉げて来た、おかげで今まで山は丁度長和を、下山日は忌風吹晴と願、てもない天気に包綱した

川原文男 見いやりのある人。

沼田が自出宿を怠めて来て因、ていろいろと、羽毛服の調うとつて僕に貸してあけるした、

このようなどさしさが純子夫人の心をうえたのでしよう。

おわり

中村博明 尻天保の兆候をいろ早くキャッチした人、

二日目へ(12月二十九日)の行動開始直後、西方上空にやさあがつた雲を見つけて、「ああ、スジスモだ、天気がくすれるぞ。あと四五時間だし、朝方はあんまり天気が良くなかった、その日午後か

藤田己三夫 料理人味博士を自称する人。

朝は人よりも早く、夜は人より遅く、ほそんじ一人でみんなの話をやり通した。  
小さくよか居頃が、ホトリの藤田を物語っている、

内藤和雄 最年少

入山初日から定行程イレンを方

こして登場した、二日目はもつとひでくるり、千丈東武のチ前まで来たときは、あの急斜面に自信がもてるくなつたのか「ここから引返します」と悲惨な決意になげかかるなか、下

しかし、ソコワソレ、若さとバイタリティ、帰りには、渋谷とデットヒートを演じるぐういに元気になつてい

た、

御苦勞様でした。

# 剣岳から五竜岳

吉田 昭三

信なのが常にニコニコ笑っている。  
「あとでまたくる」と言って、彼が  
自分のテントに帰って行きて、いよいよ  
「ケーリヨー」の声かけつきりして  
来た。吉野さんと倉吉さんが迎え  
に出て行くことになる。私の中では  
紅茶をつくって待つことにした。

しばらくして、吉田・川俣・高莊

前半は車で向として剣岳遠足隊に参加し、  
後半は単独行動として俊立山を登った。  
天気は全般に良かつた、終盤少々くずれ  
かか、たか雨にならぬないで済んだ。

この合宿を通じ、私は同じ豪爽の仲間として、お互いに助け合いながら行動を共にして  
いることを強く感じた。

それがつまらしほうくして、茂谷  
内枝・茂井娘が到着した。五時半で  
いた。

南根舟いわく、「迎えに来てもら

う」とさはうめしくて涙がこぼれそ

うになってしまった。下」私は山を  
きいただけで感心のよくなつた  
同じ山の仲間がほろほろ早月尾根を  
走り出だして見れたときは、

しばらくして帰ってきて来たところは、  
どういうわけか奥園さんと一緒にあ  
り、アリヤーがうるさく懇意交って  
いる。その合意をめつて「アリ  
ヨー」がまた聞こえたようである。

空には、轟音でもあ、たのむうめ  
ヘリコプターがうるさく懇意交って  
いる。その合意をめつて「アリ

ヨー」がまた聞こえたようである。  
予期せぬ合流となると、これで  
山のベテランから来る自

初日の十日、我々 音野・金子・  
沼田が三日平キャンプ場に着いたのは  
午後二時であった。すぐに天幕の  
設営に入つたが、「ケーリヨー」の  
声が聞こえたうであつた。吉野さんも  
人に言うと「聞こえない」と言う。  
空には、轟音でもあ、たのむうめ  
ヘリコプターがうるさく懇意交って  
いる。その合意をめつて「アリ

ヨー」がまた聞こえたようである。  
(彼等は、三の窓に暮営する計画で  
あつたが、こちらにありてくるは  
ずはうすむけつた。) 吉野さんは、  
気づいたらしく、「チヨット見てく  
る」と喜びつて出ていった。

しばらくして帰ってきて来たところは、  
どういうわけか奥園さんと一緒にあ  
り、アリヤーがうるさく懇意交って  
いる。その合意をめつて「アリ

ヨー」がまた聞こえたようである。  
予期せぬ合流となると、これで  
山のベテランから来る自

やべりよくなつてゐたようである。「  
強くてくましく」を何回も若調して  
いた。宴会を大変盛り上げてくれた  
彼女等二人は、残念なことに次の日  
下山するという。男性陣の死の説  
得でもなく彼女等は下山が決定し  
た。それにより、翌日は男性だけが  
三の宮でモラ一度合流することにな  
った。つまり、吉田・六谷・岡根ペ  
ーティが三の宮の岩をやって、そし  
て我々吉野・金子・沼田が剣岳頂上  
を経て三の宮で合流しようとしたのである。

翌日の二日目、我々は十時にモナ  
ンブ場をあとにした。彼女等の見送  
りを受けながら……

一時遅き剣岳頂上に立った。今は  
うくすると奥園さんがサイル姿で下  
から上がりってきた。相交らずニコニ  
コしている。頂上にはモラ一人。自  
立、方格好の人が居た。フクアク太  
リキミで、カメラモグチ+ガチャニ  
三台身体につるして居た。吉野さん  
がその人に話しかけた、「青野キヨ  
ウテンさんですか」と、彼はうなず  
いた。今日もとこかの岩場で登攀の  
写真を撮って来た、という。来年へ  
なる

五十一年）の山溪七月廿五には剣の岩  
場写真を出すこじう、頂上でモラ  
ニヤリトリのちと、我々は一路三の  
宮に向かう。三の宮には四箇所に着い  
た。二時頃が過ぎたころ、吉田さん  
達がやめて来た。一緒に泊るのは  
今後までである。少し盛大に夜の宴  
をやろうとしていた。隣のテント  
から吉情が出て、「うるさいから歌  
はやらないでくれ」という。こうい  
うところを摩擦を起こしても始まら  
ない。吉田さんはうらいで、彼等  
を客に招待した。山形の「ズンベ山  
の会」だという。早々に彼等はテ  
ントに戻った。その後十時までワイワイ  
イヤ、たが吉情はなかつた。さすが  
吉田さん。

次三日目は、別れの日である。早  
々に岩に取り付いて、筋書きに連れて、  
我々はハ時過ぎに落葉を防ぐために一尺  
の高さに登る。吉野君のニッカイおがあとがう追い  
かけで、カツラモグチ+ガチャニ  
四百円をするビールの中ビンモー  
ジに飲み干す。元春の設営もホドホ  
ドに名物の野天風呂にはいりにゆく  
五分ぐらい下にある。残念ながらも  
セツ氣は全然、テント場には、茨城  
県の竜ヶ崎の高校山岳部の女性徒が  
ワンサといろどりの如く……

今日は予定は沈の平を越えて阿  
曾原温泉までである。池の平小屋にはアルバイトの女子学生が居た。

「今、内田良平が来ているよ」という。「丁度今は、山に行っているので留守である」という。最初は僕にモラードモラ前の人人がいるよう方  
向がした。ところが全く見当違い。  
「ケの荷物をして人はいつ、山の写  
真家なのだそうだ。そしてこの池の  
平にはよく来るのだそうだ。

偶然にも、私はこのたびの山行で  
二人モリ山の写真家の名前を覚ることになる。

そついうことをあつて、段々遅れ  
勝ちにくる吉野さんを貰ひかう風もなく、金子・沼田の両名は、ドンド  
ン阿曾原に向ってゲートを詰め四時半ヨ  
ウト前に到着した。

四百円をするビールの中ビンモー  
ジに飲み干す。元春の設営もホドホ  
ドに名物の野天風呂にはいりにゆく  
五分ぐらい下にある。残念ながらも  
セツ氣は全然、テント場には、茨城  
県の竜ヶ崎の高校山岳部の女性徒が  
ワンサといろどりの如く……

そこはそこでして、金子さん次三

脚を持って来て、風呂の情勢とカメラにおさめようとする。こちらはこちらで、日焼けした腕や太ももがじりじりしてお湯の中につかまらない。吉野さんがイング威尔をしてお湯でぎこちないが、吉野さん、そんなことをできることない。

次の日も帳檻で始った。でも今  
日は下別山である。吉野、金子両名  
はケヤキ平に向って下山。私はこれ  
がり下の廊下を登つて奥部へと、右  
より針の木、五竜へと足をのばす。  
だ、へやうべち野さんにおびき込んだ  
下り下の廊下を走部ゲムに登るこ  
とを許可してもらつたのだ。

駄一氏は料はこから行程のため  
に書を全部やり受けた。全部など  
といふと聞こえが良いが、たいして  
ものけるがつた。いつてみれば残飯  
のようなるものがケリであつた。  
ところがあとで吉野さんといわせ  
ると「食糧を全部お前に持つて行か

れて一もって、鳴りの水平道ではハラが減つてどうしようもなかつたよ」ということになる。私も反論の機会を与えて欲しいものとさう急ぎ、下わ部下」と書ることに付次つて、立ちこち食糧探しをしてきたときに、あのクエカゴの中がう蛤い出しだ一本のアランスパンゲどんなにばく安價でせきほせたことかこの喜びようによつても、彼等がうかり受けた食糧がどんなものかおわかりいただけるだろ。

ハ時トキに復写ハフシヤウは下山シタマツを開始カイハスルした。手テを振りながらトンネルトンネルの中に消えてゆく二人の姿シズメを見送スルつていふと、なぜかしら胞ヒダにこみ上げて来るものを感せざるを得ない。がといつていつもでモグスクスしてモいうふ有いので、荷物カバンモノの整理リョウジをしてお終スルつる。ハ時トキ四十分ボン。

サリと切り落ちている。そしており庵を流れる水の音が、ゴーゴーと暖の庵にひびいてくる。鳥も少くわゆとはこの「下の廊下」のことというふうだろう。

朝がうきいていて人一人ぶつ  
からない。ただゴーゴーとこだます  
る水の音だけである。やと脇近く  
に父娘連れに会う、十文字の手前で  
あ、た、ただそれだけである。  
十字峠は字の如く、十文字に沢が  
合流していくところである。長さ二

その荒れ狂つて落つこゝでゆく水量  
を写真にみさめたが、どうも迫力の  
ある写真にはならなかつた。  
十字峠から一時向もすると白竜峠  
である。こ山までの断崖絕壁はウス  
うき、すぐ下を川が流れるようにな  
る。新らしい難關である。

白竜城にはアワハシゴがフラン  
と宙にぶらさがっていた。ミロ×  
トルもゐるだろうか。下腹そこほ  
雪渓の下層の半分ぐういがとけ出し  
ていて、大きなドーム状になっていた  
だ。ドームの天井からは、大きな氷  
滴がボタボタとひっきりなしに落ち

ている。その本夕本夕の中を、ナウハシゴを一段一段降りて行くやけで、ある。ひ、こりなしに落ってくる。ソクに、衣服はすぐさま濡れしおぼたかてしまう。濡れるのがいやだから急いで降りようとした。そのとおりナウハシゴがぐるぐると回転した。僕はハツとしてナウヒーがついた。バランスをくずして上にやっくの重みがワクワクして背中がケツビと下に引っ張られた。ハシゴ自身ぐるぐる迴っている上に、今度はアランコのように流れ出一だから始末が悪い。宙に浮いて寄り所がない。ハシゴは肩をも離れ続ける。うでが疲れて来たので、ハシゴの橋脚をヒヅではさんで冷静に考えた。どうもこの橋脚の端っこに足をふみ込んだために、ハシゴのバランスがくず山らしい。自分の足は、今も確かに端っこにつけられてしまうのである。そこでまず足をほん中に寄くことから始めた。意外にもみづまりとハシゴは静止した。

二十分も歩いたろうか、ある岩角を曲がろうとしたとき、フワマツと曰ひ前の人毫が現ゆれた。小柄な老人であった、人、こ一人いないこんな山奥によりによつてをうしてこんななりの人が入つてこら小民のだろうかと思われるようだ人であつた背のたけ一メートル五十ぐらいで腰は曲がり加減、風のまゝに吹きふれ柳の体である。板は運動靴でビショビショであり、白い長ソテンヤツはドロで汚れっぱなし。荷物はといふと、ナップサックを背中につけていた程度で、食糧も着衣もほとんどないものだらう。ヒッケルさえも持っていない。この黒部峠は、雪渓の山を越えたり、雪渓の下でくぐつたりで完全装備が必要だというのに、なんかいう大胆さであるか。

がうるさく、たのだが、スミを見て  
おりて承りました。  
「どこで行くつもりですか」  
「今日は、阿曾を原まで行きたい  
のですが、どうでしたかね」  
「私はとつこにさつやのアワベツノ  
が気に当った。島とは順當に歩行は  
筋走詰めも看えどむなるだらう。」  
「おじさん、すぐ近くにアワベツ  
アガリうす、あとどこ過ぎいすて  
ラビ取はいりません、ハシゴのところ  
ろすで一筋に行こうしよう。」  
ハシゴは静かに止まっていた。相  
交うか夫婦からシスクがボタボタ  
落ちてゐる。ハシゴのわきに一本の  
麻ツアが流れ下がっていた。用ばぬ  
ために用意されてゐるものである。  
僕は、おじさんをこのローラーでし  
ばって引き上げることにした。彼の  
体をローラーでゆわえると、もう彼の  
白いシャツはドロドロになつてしま  
つた。  
ます、僕がハシゴを上がつた、そ  
して上で足場をつくってから彼に上  
がつて来るよう命じた。最初  
はローラーも順調に下ぐりよせら山長  
僕は安心している。ところがそのと

たん、クウッとローアが引、張らう  
山田、彼は足を踏みはずしたのであ  
る。

「大ス部ですか 慣重にやつて  
くださいし」

「ハイ！」

本当に危ないところであつた。も  
しこのロードが石か、たら、彼はト  
ンサの判断でハシゴのどこかにしが  
みつくことができただろうか、いい  
ところまで上がり、て来ていたので、  
もしあのまま落、こちでそしたら、  
それこそ大変である。その上、すぐ  
下を雪とり水が流れており、ハズミ  
での流れに落、こうでも一たら、  
並々と続くドームの中、流れたまゝ  
出るものが精一杯で、とてもはい出  
て来るわけにゆかないだろう。  
それと云ふ、こちらも死んだ、た  
めで、いまのような恐ろしい連想は  
浮かぶだけもなかつた。ただクウッ  
と張りつめられたロードが意外と弱  
いものであるのに驚いた。ローア  
を伝つて感じろ彼の豊満な何とも言  
い得ぬ悲しきがこみあがれたのである  
（二）おおじさんは、なぜこんなに  
自分で手打つて、こんな険しい山

の中に入つて来たのだろうか、どう  
しても解けない謎である、矢、  
一矢乱あつたけれども、なんどり  
上まで上かることができ、矢、レト安  
ルである。

彼は僕の手を両手でにぎりしめて  
幾度もくち顎を下けた。僕も彼  
の手にぎり返した。

また僕は悲しきに泣きわがた。に  
きりつぶくでさしまいむと見ゆれる  
はと僕の手は、いややわとか弱いも

のであつた。  
僕は、おしゃんの医師を折りなが  
ら彼の姿が岩陰に見えなくなるまで  
見送つた。

こういう出来事があつたせいもあ  
つて、そり日は暮れ、ケムまで行けず  
全中の川原をじぱーきすることに一  
矢。丁度そこには二人連れの先客が  
いて「余り物ですが」といつてカレ  
ーライスをごちそさせてくれた。フ  
ランスパンぐらいため僕にとって  
ては大変なごちそうであった。

一ヶし、いつまでもここに逗びて  
いるわけにもゆかない。寂れ切つた  
足を引きずりながら見度板を下つ  
た。

五章までが長谷つた、五章ではガ  
スにまぎれた、一冬前こゝまで来て  
いて大したことではないと思っていて  
が、五章の小屋が行けども行けども  
出てこないかにはまいつた。  
五章の小屋はどうとうひてしま  
つた。

もう、自分の限界を越えていた。  
扇沢で休憩していると、見覚えの

ある女性が歩いて来た。瞬間、す  
ぐそか人とわかつた。あちらでも貴  
がつた。会社にいた昔の彼女であ  
る。あれ日音沙汰もなくやめていつ  
アーヨ、たしかが、こんなところで  
会うとは夢だつた。チヤンと連れ  
もつくつていだ。一児の母親でもあ  
つた連れというのも、いつも東京  
で話している彼だつたとは……  
この俺もどうかへしていろ！





ボルトが打つてあつたので直登でき、  
そうに見い登りはじめたが、五メー  
トルくらいで行き詰る。いろいろや  
つてみたがどうしようもなく、下ル  
トにシユリンケをかけ、足をかけ、  
やつとのことで左にトラバースして  
進む。たかだか十二メートルくら  
いの滝だと甘くみて、ルートファイ  
ンディングをきちんとやらなかつせ  
いであつて大いに反省した。

体ならしの山行としては大いに満  
足できた。思つてより体力・気力が  
落ちていなかつたので、自信を大い  
に回復できた。

### (風向記)

「つれていくてモララ」というおん  
ぶの姿勢から脱却して自分の意志  
“ど・カ・ヒ・ミ・山”だけに登ると  
いう最初の試みである。  
一の危て何本か登つたとて常に、  
セカンド・カ・アンコウであつて、  
落ちてもトップが必ず助けてくれ  
るであろうという安心感や、暗黙の  
うちたよる気持ちが前提にあつての話  
である。

“登らせてもらう。ケラッ自分の  
力で登る。”へ、放えてもらフクか  
ら。自分で学ぶへの切り替えの時  
期に来ていると志したからである。  
トップをやらなければいつにもつ  
ても岩登り技術の飛躍的向上は望め  
まい。

おりることにし、ヤニバンド付近か  
う左へ廻り込んで、一般ルートを下  
見るから下降。前定時間一時間も  
大巾に貰つてしまつた。しかし弓が  
ら自分としては、始めてのトップに  
てはまずまずの出来であつたと思  
つていろ。

今後は、確実にシケも、早くダ  
ラダラと課題である。

### (風向記)

## 滝 谷

42

### その二

## 三ツ峠

日 時

昭和五十一年一月十八日

目的

MEN 風向 穂田  
フリールートの完全登攀  
とアプローチのかけかえ等、  
人工登攀の練習

ルート

草溝ルート

### その三

## 滝 谷

日 時

昭和五十二年十一月二十四日

MEN 風向 穂田

ルート 北飛高岳滝谷カニ尾根P  
2フランケー滝谷ドム中央枝

今回までは、今までのように岩登りに

そういうふうに大きな意味で今回の山行の意  
思は私なりに大きいと考へてゐる。  
案の上、自分でトップをやってみ  
て、いかに自分にルートファインディング  
シケリ力がないかを思い知らされた  
時に取り付きのすぐ上あたりで早く  
ももたつき大変な苦労を強いられた  
だがじつは上るにつれ、段々と楽  
に登れるようになつた。キミバンド  
付近から上はアッシュなので懸垂で  
いる。思はずアルツと身がるい

午前四時四十分、秋の渓流はまだ  
明ける気配すら見せていない。  
まだ眼鏡のめけきらない重い身体  
を捲すりながら、私はテントを追  
い出で、被緑の黒々としたシルエ  
ットが白い息の向うにホーッと浮か  
んでいる。思はずアルツと身がるい

かした。私達は今日の天気をあれこれ察じながら、手短かに身仕度を整えた。もはや出発の時刻はどうに過ぎてしょっている。細かく組み上げたコースタイムを守るには、遅れたら分だけ恐はすしきない。出発を急ごう。

私達は休まずに、ただ黙々と高度を落いで、七時を回った頃にはB沢下降点に着くことがでいた。

B沢はがした急な沢である。落石がこわい。幸いB沢周辺には私達の他人影は見あたらない。ひと安心である。

洞庭の下の赤茶けたバンドヒトラバースし、クラック尾根を回り込むと、急に視界が広げた。フランケのスッパリ切れた馬太高な全容が、また私達を圧倒した。まだ誰も取り付いていない。

相変わらずの静けさである。ムラムラと湧いてくる開拓を覚えるながら、自分で丹念にルートを追つてみると岩登りを始めて、まだ日の長い5合は緊密一矢即ちで金具を取り出している。

波浦完了。いよいよ登攀開始だ。まず、いかにも重きの浮石ばかりのルートを横立にする。ニビツ千目に切、た大きさのテラスの上でひと休み。はるかに隔たった大テレットヒチコウに向こう合う格好になつた。水粒ほどの人影が、ひて呼吸いれながら私達の登攀ぶりを見物している。何やら先に、こそほゆい感じに襲われる一気に緊張が吹けて、まいり何やらリラックスした気分にさせられてしまった。

四十メートルいっぽいの大四角とピーケーに然している。がぶり貴味の重量をフリフションを剥ぎして引いて登り切って終了。實に快適である。二人堅い握手を交し複線へ。

岩陰で風を避けながら、早目の昼食をとり、私達は、本日二本目のドームに向かった。

R2フランケの割り石登攀とは、そろそくにさやかに三尾駒を下降する取付ヘトラバースするコルがちがなが見つからない。いまにはアンサインする始末である。下調べをして資料には、そんなことは書いてない。かたよう、後で聞いた話だが、彼等も三尾駒の下降は初めてだったとの事、安易に完璧バーインの後にくつづいていくものではないと思ふ。それであれ、ハイテンの運行してある取付らしき場所へ辿り着く。施行ペーティゲアアミの掛け替えて登り出た。えらく時間を要している。後続バーインが直進を決めて、少く、精計けずでに予定の一時をどうにまわっている。おまけにここがドームの中奥駒の取付であるかどうかも怪しいのである。荔の重がナラと胸こがすめる。だが、ここまで来ての敗退はシヤクである。

辛いにて、天井は走るの出合まで完熟せる種の荔ひとつない大木、くすかる心配はない。

私達はアタックを決め、アフミを取り出す。かぶった四角から左手のみフェースにルートをとつて、四十メ

トルい、はい仰ほしてセッヂを切る、上部は傾斜も緩く、スッキリした感じはないが、少々、しょ、かい個所が時折出てくる、変化に富んだ名が何かの好ルートに思ひぬだ、だが上部が詰まってなかなか進まないなくては困ります。

いた

煙々と輝く満月が足元をほどよく照らしてくゆる。遠くチラチラとやうめく沼沢の灯が、少しずつ、少しずつ輪を広げてくる。お月見下山もまた不つなものであつた

ウイスキービバク

卷之三

秋の柔らかな陽差しは、やたらと  
眠けを誘うが、ウカウカしてはいら  
はないのである。秋の陽はツルベ落  
とし、あ、という間に陽が西に傾い  
ている。最後のピッチに取りかかる  
頃には、日没一歩前である。私  
はセコンドで上って来たL君の肩を  
たたいて、そのまま終了点までラッ

たたいて、そのまま終了までラッショウをかけるよう指示を出した。何と一も、目のまくらに終了した。い、いさきかの彼女の見えるら君はとたんに、死に物狂いで登り出した。サイルがどんどん荒れてゆく。三井確保もへつたくれもないと思めれる程へ遂やくである。変にあおったことがチラッと後悔される。S君の終了のコールと同時に陽がくべた。ヤ

レヤしてある  
それが、私達は、急に終えた満足感  
を、互いにかみしめながら歸路につ

チが痛くなるようなおとフリクションで越すと「肩の自由レ」と云われる軽い傾斜のみを基準へ出だ。そこは花崗岩が風化して下盤の砂を敷き詰めにような広い場所である。すでに秋の陽は傾き朝が迫っている。こ山から南山移寄りにルートをとつて甲斐駒の頂上へ抜け、駒の守を宮千尾根七合目の小屋までは、猿が大身体には立せずテ。

広い場所であるにもかかまらず煙斜がある為、二人並んで寝になれぬ場所がなかなか見つからない。た

七

遠く姫崎の村の灯をうみ乍らおもえ

遠く飛揚の街の灯を望み乍ら思ふ  
ることは「水しである、飲みたい欲  
望にからぬかがらも、明日の「水し」  
と云ひ胸かせ、仕方なく、ヤケッバ  
チでウイスキーを口に運ぶ。よけい  
に体抜くにもかかへらず、少しあゲット  
センをあらげて飲みて、一さつた  
翌朝、南山麓寄りのハイマツ帶を  
強引に越して摩利支天原上へ、采合

わせた登山者に取扱もよく水を  
もらう。とにかくうまい水だつて。

が、ようやく見つけたじバーカサイ  
トで私とくはウ飼にありつくことに  
した。

# 池山尾根から北岳

S1.12.30 - S2.1.3.

山下京一

十二月三十日

夜又神山荘で食事と清ませ冷たい  
空氣の中を歩き出すと、太陽はすでに  
高く昇っていた。

暗く長いトンネルをぬけ、やっと  
ベースが出てくると深沢のバス停。  
ここで軽い食事や用足をして、樹

林の中を下降を開始した。  
木の根づたいの危険アリは、重い  
荷と相まってつらく苦しい二時間だ  
ったが、やっと次のたどりに出、こ  
こでパートイを二つに分け、中村、  
周根、石井、津山、それに私を含め  
た先発組と、残りハ名の後発組で池  
山小屋めざして急坂を登り始めた。

十二月三十一日  
十五時四十分、木ーコンの頭着、  
元に着いた者の手でテント設営、  
アローグ横みもほ終っていた。  
寒天と言う程ではなく、だが、風  
も強く寒さも厳しかったが、それで  
モテントの中は暖かさに満ちていた。  
しかし、私達先発組の遅々とした  
ベースにさる事、後発組はさらに遅  
れ、十七時、トランシーバーの交信  
で直ぐにピバークを決定。  
テントを設営してから一時間後に  
後発組は到着した。

昭和五十二年一月一日

三時起床 天候悪くなくバツ  
トレスアタックは一時中止、ハ本山  
経由で全員北岳頂上を目指す。サフ  
サック行動食やテルモスをつめ、  
み、雪の稜線を行く。  
バットレスも強風の中、足元にな  
らず大樟木へと深く落ち込み、さ

八時出発、九時に池山小屋着、も  
うこの辺からさ、つい登りもなく、木  
ーコンの頭目指して比較的なだらか  
な道をや、くり進むだけ、初日と違  
て調子が出てくると、ほぼ順調に  
行進をこなしていく。

この日もパートイを二分一、吉野

石井・長沢、それに私の四人で先発  
石井は立牛で後発組に合流して、吉  
野・長沢、私の三名は、後発組より  
連れ、それホーコンの頭目指  
して、その流れでホーコンの頭目指  
して行く。

十五時四十分、木ーコンの頭着、  
元に着いた者の手でテント設営、  
アローグ横みもほ終っていた。  
寒天と言う程ではなく、だが、風  
も強く寒さも厳しかったが、それで  
モテントの中は暖かさに満ちていた。

なから地の底へ続いている長い根え  
る。

正月だけあって多くの登山者が見  
うけられ、夜は賑やかで賑み固められて時  
時前面に出ているハイマツの枝に注  
意すれば、特に走像もない登高だ。ま  
たが、ハ木のコル付近は、尾根が  
飛く登山者の列が出来る所をしばし  
はあつて。

山頂三一九二米の絶巒に立つことが  
できた。

正月だけあって多くの登山者が見  
うけられ、荷物も詰み詰められて時  
間節約に出ているハイマツの波に注  
意すれば、特に危険もない登高だ。  
たが、ハネ古のコル付近は、尾根が  
狭く登山者の列が出来るとすこしはし  
はあ、だ。

北岳への最後の登りで風は一段と  
強くなり、雪を飛ばさない積冰け、  
足道が露出していくで歩きにくく、時  
時吹く寒風にバランスを崩かこひな

しかし、風雪蒸一く沼田氏方とは  
鼻の辺りが白くなる程激しいまで  
十五分ほど下山開始。十二時四十五  
分にテントに戻り、一時半より新ト  
モロボに直くて雪上訓練を行ふ。  
頂上往復の疲れもあり少々つらい  
訓練だったが、さすが三千㍍上での  
訓練だけあって、今に役立っている  
事も多い様に思える。

そろそろ夕食、二つ調理してテント  
の方方に新人、の方に火籠湯でク

食の準備の都合上におかまいなく、山城よりく酒盛りが始まつていな  
外に腰、胸襟も下けり。一つのテ  
ントに全員集まつてあ魚を食つたり  
こゆを食つたり

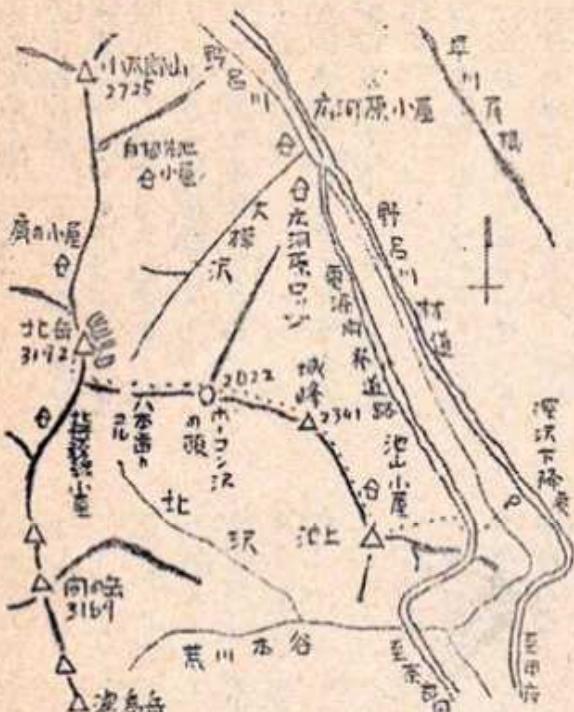
酒がかぶりきりて果た瞬間の辰  
大ナベにいろいろふり込んでへキヨ  
コレートヨで） ゆいわいやってい  
る時、何うふエアスリ安定な  
台車上に大ナベだから、餘だひぶ  
かったのか、一人で傾いたのか、大  
ナベがひっくり返って畠田氏の足に  
こぼれたりだ、七軒ハ倒、それほ大  
変、後の如きも悪かつたが、数が届  
けう状態ではちくなむ程心とい火傷  
をしてしまつた。

酒も程々  
云うまでやない、ことだが、酒好き  
の念原詠氏……、良くわかってい  
る事と思う。

一月二日

そなへてバツトレスアタソ  
クに止。一ヶ所空は晴小波り。雪  
に轆く北岳。左に日の岳。飛鳥岳。  
ふり立れば甲斐駒ヶ岳を上げ。今  
冬の南アルプスは雄大なる広がりをも

北岳概念圖



参加者 CL 音野 中田 牧野  
中村 沼田 萩田 向原  
山下 石井 沖山 長沢  
齋井 國田

つて私達を取囲んでいた。

十一時下山開始 アイゼンも着け  
木曽の斜面をゆっくり下る。それでも  
も荷に振らせてバランスを崩す。樹  
林帯に入つてから何度転んだろう。  
北岳ももう見えずただ歩く事だけ  
に専念させられる。

藤田氏は根性で靴を履きケナむと  
つ言わずに下つて行く。ただ黙々と  
下つて行く。

前に転ぶのを恐れてつい尻もちを  
着く。アイゼンをつけねはいやでも  
前に転ぶ事がわかっていたが、やはり  
アイゼンを落とした。牧野氏は、前でステッアを切つて  
いる。

登り口はうつて立つて遠いテンポ  
で下つてゆくと、二時間半で池山小  
屋に到着。しほしほ休んで樹林の中  
をジクサク下つてゆく。  
あるコ沢橋が下に見え出し、長い  
下りをきうすぐ終りに近づいていた。  
林道には、マイクロバスが登山者  
をいっぽい乗せ済みと待つていて。  
「あ、バスだ」と心、た瞬間

大きな尻もちをついてバスの標識が  
靠まる。大いにはずかしかったが、

岡田さんがそれ直後、ため押一の転  
びおこめをしてくれた。

走り去るバスを積目で見送り、  
沢のたそとで落葉、最後の夜酒もも  
うなく、焚火を回んで歌を唱つたり  
空には星、背中はとくとくする寝寒  
くとも雪の出深い一夜が下さっていた。

一月三日

朝、長沢さん足に火傷、火傷には  
十分慣れているつもりでそこらいう  
事がある。

彼女には申し訳ないが、夜叉神  
詠まで歩ひかに済んだ事は、正直書  
つて助かったという思い。

マイクロバスに乗リ甲府へ向う。  
甲府の城跡で大いに騒ぐ。正月も  
もう今日で終り、晴れ着姿の多い甲  
府を後に列車に乗り込めて外は夕暮  
れ、車窓に南アルプスが雄大なシル  
エットとなつて、多くの思い出を残  
してくれた冬令宿ももう終ろうとしていた。

まとめてして

池山小屋経由で北岳登頂、合せ

てバットレス登攀乙とのサポート。  
バットレス合算が目的の合宿ならば  
それは新人訓練とかめた變則的山行  
だったが、それでも私の孫の新規  
人にとつては、それだけでも冒る物  
の多い合宿であつた。他の全員はどう  
であろうか。

しかし、火傷の事故は幸ちるハア  
ニシタに過ぎなかつたとしても思  
えない、「毎年あることだ」という  
先輩もいるが、我々新人にはショックな出来事だった。

どんな小さな事故でも山では絶対  
にやるされないとすれば、けつて  
成功一矢念とは言えないと想ひだ  
今後、再び北岳を合宿に取り上げ  
るならば、また人數の面でも今回の  
様な損失を行う事が出来るのをうま  
く連つたバリエーションを取り組ん  
で面白いだらう。またそうすべ  
くでなければ春晨はないと思う。  
冬の南アルプスは、それだけ穴込  
んで研究してもいいだけのものを持  
つていろようと思える。

# 一の倉沢三ルサンゼ

石井 春田

一九七六年十一月六日

石井 風間

十一月五日、二十二時過、大宮駅  
集合、長岡行に来る。

土合駅で六時過ぎまで仮眠、起きた  
とすでに廻りは白けていて穿過さ  
たさういがある。

一の倉沢出合七時前、朝食をとり  
七時四十五分に出発する。天気は上  
上であるが、朝霞飛騨あたりには雲  
がかかるのであり、谷全体が白く水  
と溶け出しているような気がする。  
なんとなく氣味が悪い。

途中「ヒヨンクリの滝」下への下降  
でヒヒリ、南板テラスへ着いたのは  
八時三十分になつていて、この頃  
になると既に陽も完全に高く登り、  
体半ドテで仕方ない。何とものん  
びり一矢誓願である。すぐに準備を  
一本のバンドへ、ニルンゼ出合十時  
にかかるノーサイドで各自別々のル  
ートを取り廻る。ゼ側に入ると、右

岸をつたて三ルンセド、直下に出  
る、既に先行バー・ティが登場中であ  
る。六分待たざめた後、瀧原がトッ  
フと切って行く。F1右側のリップ  
グだけに登り、左側に抜け天候有分  
なテラスの上で宿保する。三人元気  
く旅口。ラストの石井がそのままつ  
るべ式にトッアで行こう。下で待

F2は、先行バー・ティのトッアが  
吉瀬にて登つてゐる。いいテラスが  
ないので風向、運転手によるか下の  
テラスで待つ。かれこれ三十分、六  
十分位待つたのではないが、狭い  
テラスの上で立ち、ばらした、天端  
足がつづば、てきた。

こんなに待たされると知つて、いた  
ら、下のテラスで待つて、いたりに、  
竿の部分まで三人行き、石井がト  
ッアで登る。次の下段分は、ツンヨ  
ケンヨに濡れ天千ムニー旅になつて  
おり、雨足をつけてりながら登る。  
下がえ見上げたよりすこと長く感じ  
られる。滝の上部で左側にトラバーチ  
ス、つづいて細いホールドの余壁  
に出る。一歩上部のいいところに  
じんか打つてあるのが、ホールドが一  
ヶりしていく不安はない。

写真撮影を折りもせぬからうれしいな  
気分である。ここを抜けるともう尾  
端はないといふことであるし、時も  
既に四時を指していろぬ。——カイ  
リでセツチを上けて行く。上は革付  
スクアの腰傾斜等で左方を、前方に  
掛けて黒い廊壁が迫ってきている。

一の倉沢 ニルソゼ

石井  
左咀

掛けて黒い岩壁が迫って立っている。  
上部はそう枝縁が見えている。  
ルートは、黒い岩壁に沿、下石削  
のスラブ等を取る。上部に行くにつ  
ながって斜斜がきつくなり、漏れて  
いく。こう走り、  
最上部で再びサイルを使用した。  
ルンゼの末端、行き止まりでトラバ  
ース。枝縫い抜けて終了である。  
十六時四十分。あたりは既に暗く  
なり切れている。開墾枝縫に出て、  
露の面見で下降。センターハリスは  
二十三回目だった。

一九七七年十一月三日 石井(草稿)

朝のじ一時には比べ、この雪渓に  
立るとさすが登山者ノ数も少石い。  
特にヘルメットを構つた者は放々我  
々の目立つ、陽が昇るのも遠い  
し、出合いで寒い思いをして長い時  
間待つていても仕方ないで頭で仮  
眠り、五時に出発。

一の会合に出合いに薦め、朝食をとつた後、夜が明けるのを待つて六時に出発する。

カイルは一歩持っていたが、サツクに入り下まで、セルアストにシニリン下とカラビトハーケン、三、四五、六メートル程の脚引を二本持つてだけの、いだちである。左側がかぶさった感じで暗い濡れたレンゼの中を行くと、時々虫煙や

チヨックストンがあつたりて、つまり意味にある。右側の方を見ると車付の斜面になつており、トレースが走っている。そんな感じでレンジの中と右側車付帯を交叉に登った右側に大きく巻き進きて、中央奥壁側に入り込まないよう注意したが部分的にはかるい悪い部分もあつたやんとトレークがついていろし、ひんが打ってるので、諸々直ったことがあろとは思ふんだが、ニルンセとはこんな爺ーい所なのかと認不足を認め、そもそも、ルートファインディングが悪く、至極迷い込んでしまつたのも知らなかが？、しきしながらアスフルスリーブにヤンを打ち込んで腰垂下降する派にもいかないので、その都度それまで突破した。



送り届けたところだといふ。交渉の末、我々もそれがあやかることにいた。ホーとしたのが実感であるが、隣合甘いと反省の感もあった。

「しかし、ここは『我々は、バット

レスを巻りに来たのだ』という目的

が尋ねられたので納得しよう。

広河原に着き、十二時過ぎまで仮

眠した。二俣には四時三十今頃着いた。すぐテントを張った。七人用

のテントに五人は、ぐるりゅつたり

アヨる。その日はぐっすり眠った。

四月二十日、昨日の疲れいかへ?

一寝坊してしまった。

ハジテテントを出発し、一尾根の

取付についたのは、十二時近が、大

一尾根のクラツンツクルートには、向

吉野・山下・正面壁ルートには、岩

根、石井が取り付いた。

正面壁は、革付ナラスが取付で

いた。ほな高度差二十メートル程の

少々がぶり氣味の正面壁が続いている。

何か全体的にソベリーティーで、岩

の色もさうく嫌な感じがした。

すぐ準備し、南根がトップを切

つて取り付いた。力がなかなかどう

である。垂直を越え、二二六十五メ

一トル程がイルが伸びた所でコール

ゲ梅ケリ、続いて取り付く。すぐ

つま、た、三つ目のヒンヒをうして

も届かない。結局最後は、その部

分をコボウで束り切る。

確保楽に着いた時には、陽はだい

ぶ傾き掛けていた。全身もうトッタ

リ非難と疲労と自慢夜更でかなり

いじける。

時間そく、たゞですぐに出発する

今度は石井がトップになつた。リソ

ジの上のすらどくえぐみで千ムニー

に取り付き、迷引に乗り越えようとす

る。荷が引け掛かって上からない。

仕方なく、一端、体を外に出した時

頭がクラクラとなり全員の力が抜け

た。急に体が岩から離れ、つかもう

と一丁ユリンドルが、サッと手に離

れた。「危い！」と震う間もなく、

足元にあつたハーケンが、良くな

ら前の前にあつた、一応斜面に立つ

少々がぶり氣味の正面壁が続いている。

何か全体的にソベリーティーで、岩

の色もさうく嫌な感じがした。

すぐ準備し、南根がトップを切

つて取り付いた。力がなかなかどう

である。垂直を越え、二二六十五メ

伏地戦し、今度はスムーズに衆、誠

す、別にたいへて難い前では石か

、たのに、それを考えろと實に悔し

い。

そこを抜けちと、上は雪深づたい

に今まで続いており、冬に踏んだ頂

を再び踏んだ。

ハ本山のコル経由でテント場に着

た。

今日は、自分をぐらまに情けなく

不本意な一日であつた。一日を反省

し、今後の満進を誓い、かつて貞高

れど亦に着く。

## 屏風岩 中央カント

石井 秀明

一九七六年九月四・五日

MEN 教導 吉田 石井

上高地に到着した時はすでに周囲

は白けていた。未だ晴天の覚めない

自そこそりながら、早速、屏風岩へ向って出発する。

屏風岩という言葉は以前から良く耳にしていた。自分なりにも「すこい岩壁だ」という位のイメージを持っていて、本当かどうかは知らぬのが、今、こなかう自分がそこで登るんだと思うと、はたして本当に……？ 自信じうぶんない気がしてくる。今までも岩壁をろくに登ったこともなく、せいぜい沢やケレンテで遊んだばかりに、しかし、そんな不安やモヤモヤも、局所的にヘルメットを持ってアラアラ下けながらいはーりフライマーケットで箇て歩いていると、不思議とすべてフツ飛んでしまって登れるような気がしてくる。やがて横尾を通りす手河原に出るここまで来たのは初めてだ。下のト前を見上げると陽射しにカテカと光ったドーム状の大岩壁が立ちほだかっている。

「屏風岩だ！」相像っていたよりもるかにすさまじい威圧感だ。こんなところ本当に登れるのか？ カーナッペリーリーいて福井場所を何もないぢやないが、本番を目の前にし

て再び不安にかられる。

「しかし、「ここは東壁で、お前の登るのはもつと先の草付壁だ」と云われて半分ふっ、半分ガッカリする。谷川カーナの倉もそうだが、これだけ素晴らしい岩壁をみると、正剣に登る者なう誰でもアラではないかーーー！」押出しを過ぎ、さらにしばらく行つて竹で沢を渡り、小さな敷石をつめらよとしたテラスに出る。何かさわり中草ホウホウで岩巻りという感じがない。

「しかし、既に登攀は始まつていて木と草をつがみ、或は踏み分けながら登りづける。下を見るようにもつかンニがひどく全然見えない。かなり傾斜があるんだろうが高度感がない。自分で意外な程落ちついていた。もし、下がる見えだつたら

はたしてどうだつたか？」  
「しかし、それもつかぬ、高處を登りきて岩登りうしくなってきた、老鳥を飛り越えて、小さなテラスに立ち確保しながら周囲をみわたり、朝ハ晴れ、登攀を直面した。起立、

すと、はろか下に橋尾林が流れており、矢直に立ち止まつたんぢやない。矢を貯物しているのが分かる。そしてすぐ目の前は空だ。我々は岩を登っているんだとあらためて実感する。累積で登っているバーティからコールがかかる。意外な程の近くに壁マ、こうらも元気よくコールを返す。インセルに到着して今日は陽は傾きかけた。同時にだ、夕、ちょうどよいテラスかふーたので、今日はここでヒバーキするここに一泊、周囲リフレッシュゼンにサイルを通して、三人組に並んで寝た。身は四十五センチメートル、国體から寝台より幾分狭い感じで寝かえりもとうてないしがも足元が下がつて、いろりで寝ているうちに体がアリ落ち、テラスから半分出てしまう。寝ごこちの良いベットを作るのは、それは大変な依業だった。

「秋ともなると、ですが山の上は寒い。朝方の冷え込みで熱睡できない。朝起きて迎えた、

本日は、登攀終了後、上高地まで

けりのせいか、体が重くバランス  
が悪い。やはり少々、ラオ・ミンタ  
アーフでもいたいところだ。

結局、終った後についたのは四時を  
回っていた。このころは体中ヲタク  
タクであり、各取終了と積つ余裕もな  
かっただたスケールの大きさに驚  
いた。

## ある話しあいから

- A. 一年間の反省と今後の会の活  
動について、何でもきたんなく  
話し合ってもらいたい。
- B. 会に入っている以上、自分の責任  
を自覚してもらいたい。山詫会の出席  
公山行への参加、各自山に対する  
一歩一歩を歩いてもらいたい。
- C. 過去一年間の山行並びに山詫会の  
出席者数が取らされているので、来年  
の路にも何等かの協力をしてもら  
たい。
- C. 山に向かうの不満とか、希望が出  
てこない、会の組織とか構成の意見見  
たい

時間がなくなった。屏風の頭へ  
行くのは止し、後で下駄するこ  
とにした。すわりは次第に暗くなり  
はじめ、陽の落ちると、我々が下  
降するのと競争になつた。からうれ  
て暗闇に立る前に種見谷へ到着した  
月明りの中を上高地へ向うと、乗  
鞍バーティが待つててくれた。

- D. 山詫会の弊病等があまりよくない  
自分で書いたことを書って、山詫会にはか  
つてみても、同調者がいないとガッ  
かりしてしまつ。
- E. さすやけに、時間を使うらしいこと  
が問題である。

- ばかり、不明――
- 山を魅力あるものに企画を標準で  
さながらたことを反省している。
- D. 役員であることの仕事とせず、会  
員の筋筋には批判があると思うが、  
他会員とのコミュニケーションがな  
く、不明――。その辺の会の会

- A. 今までは、リーターより役員が山  
行の計画を立てていたのか、  
リーター会の中に企画する人を何  
人『三人人』でヨコメてもら  
いたい。
- A. 令和元年山行は、山城を決定し  
ているが、他の山行については、  
会員からの意見を聞いていた。  
山行がかなつて、いた。

- E. 希望として、毎回同一メンバ  
ーしか山行に行けず、中堅層とり連  
絡がとれます。一緒に行くことができ  
石かつた。機会があればいつでも行  
きたい

- A. 全国立派の人数が少く少ない程  
ナ人十色で山行形態も変わってくる

のではないか。

F. 十人十色の山行を充分生かしてみれ

ろか。

A. 特色ある人を 役員・リーダーに  
選出すればよい

G. 会員の中に何割くへ行きたいと  
いう意見が出て 強ければ尊重され  
るは不だ

H. 以前はそのような計画でやつてい  
た。自分の希望が強くなければ出来  
ないのではないか

D. 今までの役員会・リーダー会が動  
けたのは、組織を有機的に動  
かせなが、天ということがある。  
意見を聞いたけど意見が出万が、

I. 役員会・リーダー会の盛成人員を  
替えてみたうどうか。

C. 役員マスターが勤かなかつた  
昨年一年間の出席率が非常に悪く、天  
常いいことではないが、毎月第一  
日既日ならず一日既日と

J. 最初から日を決めておくとうまく  
行かないような気がするが、自然發  
生的を持って行くより一たうよい

と思はば

B. 今回の会には、巻巻り中止と、維持  
ヤフ山中止との人達があり、大至く  
今けで二つのタルーフがあると思う  
が、このタルーフニツヅラまく運び  
イを取って行かないと、今後とも同  
じ状態になるのでは。

I. 言言しない人もいるので、発言  
を求める。

A. もう少し遡り下けて話し合いたい  
ニつに分けたのではなく、全く  
できる山行を一鲜明—

I. 今まで取ってて、この種の問題  
は、会創立以来三年目にいてから  
たびたび起きていて、

会の停滞は、役員の指導性があるか  
天のでは、役員の責任が外向にあ  
ろう、寒くなることについていろ  
いろ考えてもらいたい。

L. 新人薦美に力を入れるべきだ  
だければ無理である。

D. 会の内部でコタコタケアーティ  
イカ氣がでててしまう。

M. 会計をしていて会費の集まりが悪  
い、(笑)

N. 新人会会に居つかることが原因  
であるが、中堅層はしきりにちか  
つたことにも大きな原因がある。

O. 巻巻りと報定の横の連絡がつかな  
いことが、会の運営に大きな原因を  
きたしている。山行に両方満足でき  
る山武を達成でもうしたい。

P. 自分達が入った時は活

く持つて行くこと、役員に骨をお  
てもういいいろいろな手立てを考え  
てもうしたい。例えは、スライド  
一杯、天気図作成講習会、会報発行  
等、とそりく準備しておこうが、今後の  
役員に期待したい。工場の中に云  
いつくまでいる。

J. 役員としての反省が出ていないの  
で、これから出るとどうが、今後の  
役員に期待したい。工場の中に云  
いつくまでいる。

K. 音は、同じ年代でうまく運営でき  
たが……年代が広がったので絶対  
的にやるのは無理である。

L. 新人薦美に力を入れるべきだ  
だければ無理である。

M. 会計をしていて会費の集まりが悪  
い、(笑)

N. 新人会会に居つかることが原因  
であるが、中堅層はしきりにちか  
つたことにも大きな原因がある。

O. 巻巻りと報定の横の連絡がつかな  
いことが、会の運営に大きな原因を  
きたしている。山行に両方満足でき  
る山武を達成でもうしたい。

P. 自分達が入った時は活

このようになつたのは、会全体に奇  
三であるのではないか

P. 合同山行がないと、初代者はなか

F. ハイキニフモ取り入れて山行を組

Q 新人だが、こんなに会員がいろと

R ほん、クリアだ。「笑い」  
OOさんが氣に入つたので、会社

通じて色々な人と知り合いになりたく入会させてもらつた。今後、色々

山へ行きたいで  
まろいく方頃  
いします。

自分としては、岩登りも競走も、  
知らない山へも行って見たい。

自分とては何もできなかつた。

卷之三

以上が昭和五十一年三月二十四日の総会において、一年間の反省

と今後社会の活動に関する問題等についての詳しい記録である。

この記録が、よりよき発音の言葉を記録していかなければ困るらしい。最後まで記録していかうとも不明である。

机と整理していただき、この記事が出て  
来たので、丁度、会報を発行する  
準備をすすめていた時であります。こ  
んなふう一合いが持たれたことを想い、こ  
出すのによい機会ではないかと掲載  
した。

左方　発言者氏名は、発言順にA  
B C ……と記入。

(九) 中村

○○○○○○○○○○

冬山合宿回顧

一  
ある企画がり

ターニング・時

富士  
共助

それはもちろん念官の目的が「リ  
ーター養成」と掲げられた事に今分  
かる要素を有する訳だが、またそれ以  
外立場を一層も刺激を与えた、もし  
この冬、天候だけでもそぞろ小町合宿  
であつたなら、少いに貰ひ窄む寧であ  
つたが計り知れない。ヨコに立て面  
に聲であつた。

さて、ひとりの会員がリーターと  
して意識して時、ルの中にくづか  
の変化が現われる。こなほ私の性格  
によろもりであることを知れないが私  
はそうであつた。

一つは妙に筋氣にのるところがある  
別に意識してリーターではあるがう安  
全登山を宣言させようといふ意図が  
あつたとは、今想えれば考らしない  
こんな言を発しては、他の会員説冗  
かう批判を浴びる下なるがも認められ  
いか、全く無意識からうらに生きて  
くろ精神作用うらい、實ひひとつメ  
ンバーの足どりいこつぱ實になつて  
述す體にならぬ、そのようなな  
時、私は自分との戦いであつた。と  
いうのは、入山に附して私は、恐れ  
遠を第一に考へていたからである。

そんな両者からくる精神的の束が  
今合宿の結果となる。だが、私に  
口々にその判断の正否が下せない  
「では不満足だ」のかしと問う  
のはついで、満足な山行だったと  
私は言えるのである。

二つめは、先にモウ一解かれたが、  
メンバーの動作が気に入る事である。

今まで皆登校の關係が、明らかに  
余を運営する上での關係となる  
のである。そんな立場から見た後  
輩の動作は、この冬特に適度で、う

山で、こしから多くの仲間が入会し  
てくるであろう当会に於いては、  
冬の拠点と共に無視できない  
一つの課題として置かなければな  
らない。

私自身、リーターとして認識して  
今、この問題については積極的に物  
をかけたいと思っている。これは、  
私たちリーターに譲せられた当然の  
義務なりだから。

私個人として、リーターとしてい  
ういう思いの致る合宿であつた。が  
つてこんな何んを一矢山行は石が、  
たろうと自慢する。

今の私には、裏のリーターという

ものが全くといっていい程解ってい  
ないようである。こりがう私自身と  
の努力は暗いものだ。諸兄  
の叱咤とも仰き、さらに成長せんと  
今後の冬合宿を回顧しつつ迷意一  
てゐる。

(昭和五十二年度冬合宿より)

### 感想

山下 京一

山詫会が山行における事実上の出  
発点であり、幹事長である事に長論は  
ない。その山詫会の出席者が非常に  
多い課題として置かなければな  
らない。

今、この問題については積極的に物

をかけたいと思っている。これは、  
私たちリーターに譲せられた当然の  
義務なりだから。

山詫会の出席や合宿、それも去年  
の実績を見て会員が自覚を云  
々するには簡単だが、会がひとつ  
の既得である以上、事業上の動脈硬  
化の原因を非横暴的な会員へ押しつ  
け戻すはたいてい会の歴史に組み込も  
うとするのは、現時まで会を動かし

ている者の工合ではないだろうか。  
要するに山詫会や合宿において、  
非横暴的に行なうとする事をしないと、  
会の内部にあって、現在における  
会の指向する所をそのまゝ伸ばさう  
とする会員と、どうしてもそれにつ  
いて行けない会員の行きが、それ  
は然然性を庄んでいる様に思えるので  
ある。つまり会と自分との關係を全  
く見誤ってしまつて公費がいるとい  
うことだ。少なくとも会員募集につ  
オーラウンドな山行と銃打つ被  
り、また現代における社会人山合會  
のあり方と照らし合せて考えるに、  
多様な山行福間を持つ人間を受け入  
れてゆく態度が会の中に現れ、ほ  
かの發展はおろか自然消滅していく  
危険性がこの段階以上にあらわか  
ではないか。

山詫会で合宿に出ない会員の切  
捨てを考える前に、石せんが出て  
こなくなる、にヶときえ、そつせざる  
と何んか、たゞ理由が、会の動向の中  
にある事を直面に認めるべきではない  
だろうが、岩を茶じ酒を飲んでク  
タをよくのか会員の当然でいう様な  
状態なら、いくつ会員の肩では無い

ても次第からぬけ出すことは出来ないだろう。  
大きな巻を巻きたり、海外遠征をしたり、記録を残せる山行を実践する事だけが「良く働く会」、「呑れた会」であるという観念は、もう昔のものであらと私は思つたが……。

(渓稿ニユースカセ等より)

継集 俊郎  
ようやく第二十二号を発行することができました。会報係を引き受けたたゞ、ケルとうで、ハバタマラソシランナ・ホ足をフラッゲせてゴーランに入ったような感じです。このでランを終えてみて、二度とマラソンなんかすまいというのが今の素直な実感です。

以前にも二年程この担当を引き受け、二十・二十一号と発行しましたが、その後担当者が二年経過わりダメ印刷の「津波」と期持していたのですが、その人は、今はもう会に在籍しておらず、前二十一号に掲載できなかつた原稿を渡してしまったのでですが、その人は、今はもうの発行となつてじまい、寄稿くださった会員氏には大変申し訳なく思っております。

なんとか発行したこの二十二号も字は汚く、誤字、脱字で読みにくいいものと思われ、皆元の叱責を貰ひております。また、原稿を寄せてくださった会員氏には、ここを借りて御礼申上げます。

### 渓稿第二十二号

昭和五十三年四月一日 発行

発行責任者 浦和渓稿山岳会

中村博明

会報局 浦和市街ヶ谷四丁目一番一號二二三六

牧野翠雄方

編集・印刷

中村博明

